
魔法少女リリカルなのは～集う光～

天童翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜集う光〜

【Nコード】

N4543N

【作者名】

天童翼

【あらすじ】

転生、それを果たした少年は何を望み、何を願うのか？
その先にはいったい何が待っているのか？

今はまだ、それを知る者は誰もいない。

魔法少女リリカルなのは〜集う光〜

はじまります

(本作は魔法少女リリカルなのは〜奏でる世界〜[http://n
code.syosetu.com/n8846m/](http://n
code.syosetu.com/n8846m/)の続編になり
ます)

本編に入る前に

初めましての方も、四回目の方も、一応、初めまして天童翼です。

この度、私の投稿していて、魔法少女リリカルなのは～奏でる世界～が完結しました。

その続編にあたるのが、この魔法少女リリカルなのは～集う光～です。

誠に申し訳ないのですが、完結後、すぐに掲載していた分は勝手ながら削除させていただきました。

プロット作成中に大きな落とし穴のようなモノがありまして・・・どうしても、この段階で氷の歌姫編を行いますと、シナリオが破たんしてしまうのです。

私の未熟さが招いた結果です。本当に申し訳ありません。

現在、大幅プロット修正後にきちんとした後に～奏でる世界～のその後をきちんとした後に、もう一度、完璧な形で～氷の歌姫～を掲載させていただきます。

楽しみにしていただく方には本当に申し訳ありません。

それと活動報告の方にも書かせていただきましたが、連載は再開させていただきますが、かなりのスローペースでの連載再開となります。

今まで待つてくださった皆様には本当に申し訳ありません。

最後になりましたが本編に入る前の注意事項です。

本、作品は『奏でる世界』後のお話をオリジナルストーリーでお送りいたします。

すでに『奏でる世界』で、数多くの原作ブレイク要素とキャラ崩壊が含まれます。

そついうのが苦手な方は戻っていただくことをオススメいたします。

それでも構わない、という方のみお進みください。

最後になりましたが、これからも天童翼をよろしくお願いします。

キャラクター紹介（原作に登場しないキャラ）（前書き）

ここでは、前作のキャラを紹介します。

ちなみに、奏でる世界を読まれていない方のための紹介ですが、かなりのネタバレになりますので、奏でる世界を読むかも、という方は、見ない方がいいです。

キャラクター紹介（原作に登場しないキャラ）

キャラクター N O 1

主人公

名前 たかまちなで
高町奏

転生前 てんどうかなで
天童奏

年齢 15歳

身長 165cm

体重 60kg

魔力総量 SS+

希少技能

N O 1 聖剣解放

名前、能力を知っている聖剣を創りだすことが可能。

N O 2 マスター・オブ・プログラム
M O P

ありとあらゆる、コンピュータを管理下におくことが可能。

備考

ある日、ネコを助けたのが、きっかけで、魔法少女リリカルなのはの世界に転生する。

そして、彼は高町家の次男として転生を果たした。

しかし、彼は、普通の人間ではなく、世界のバグを修正するための存在『神』を創りだした人物クリエーターの転生後の姿だった。

クリエーターの力の特訓も行っているが、未だに使いこなせていないので、希少技能と呼べない。

しかし、その力は強大で、奏の感情が爆発した時など、特殊な環境の時のみ本来の力を発揮。ただし、体への負担はそうとうなものである。

キャラクターNo2

奏のユニゾンデバイスNo1

名前 梨桜（元セイバー）

年齢 不明

身長 不明

体重 不明

魔力総量 S +

備考

奏が、転生する際に、神である、アテネの力によって、奏のユニゾンデバイスになった、Fateのキャラクターである、セイバー（アーサー王）。

現在では、自分の過ちに気づき、新たな名前を奏からもらいうけ、奏の騎士として過ごしている。

奏の剣の師であり、未だに、奏と模擬戦を行えば、勝率は五分五分である。

奏が創りだした、カリバーンを常に帯刀している。

他にも、補助の魔法が得意である。

年齢などを質問すると、カリバーンで斬りかかれたため、不明が多い。

キャラクターNo3

ユニゾンデバイスNo2

名前 桔梗（元リインフォース）

年齢 不明（闇の書と同じ）

身長 不明（測ったことがない。）

体重 不明

魔力総量 S

備考

夜天の魔道書から、分離して、現在、奏のユニゾンデバイスとして生活を送っている。

ちなみに、はやてのユニゾンデバイスをやめる時に、自分のリインフォースという名前を自分の次に、はやてのユニゾンデバイスになる、ユニゾンデバイスにつけて欲しいと願ったため、奏より、桔梗という名前をもらい受けている。

（奏の希少技能であるMOPの能力の影響を強く受けたために、はやてとユニゾンできなくなってしまったため。）

基本は奏たちと生活を共にしているが、時々、はやて、守護騎士の所に遊びに行く。

奏、梨桜がクロスレンジを得意とするため、ロングレンジからのサポートが多いが、決してクロスレンジが不得意なわけではない。

キャラクターNo4

幼馴染

名前 あたちはるか
安達遥

年齢 推定25歳

身長 169cm

体重 不明

魔力総量 不明

備考

奏の転生前の幼馴染、現在何をしているか不明。
ただし、奏のことを一途に思っている。

キャラクターNo5

復活したお姉ちゃん

名前 アリシア・テッサロッサ

年齢 12歳

身長 158cm

体重 不明

魔力総量 A A A +

魔力変換資質

雷（白色）、本人は白雷はくらいと呼ぶ。

備考

奏のクリエーターとしての力で、蘇生されたプレシアの娘であり、
フェイトの姉。

死んでいた期間は歳をとっておらず、奏やフェイトよりも、歳下になるが、れっきとした、フェイトのお姉さん。

まだ、姉妹の再会は果たしておらず。
再会を心待ちにしている。

キャラクター No 6

死ななかったお母さん

名前 プレシア・テッサロッサ

年齢 本人希望で29歳

身長 165cm

体重 本人希望で49kg

魔力総量 - S +

備考

奏の力（クリエーターの力）によって、アリシアと共に救われた。
未だに、フェイトとの再会は果たしていない、現在は罪滅ぼしのために、管理局で保護されたプロジェクトFの子供たちの身体検査などを行っている。

キャラクターNo7

軽いノリの神様

名前 アテネ

年齢 不明

身長 168センチ

体重 55キログラム

魔力総量 EX

備考

クリエーターによって世界のバグを取り除くために創られた存在の内の一人で、その中でも上位の存在。

作中では、語られていないが、超絶美人である。

黒い髪で赤い瞳。

肉体は、どうみても、20歳代前半で、巨乳である。

真面目な話の時以外は、語尾に をつけるのが、癖。

ちなみに、極度の可愛いモノ好き、男の子でも女の子でもどちらでも、OK。

E p i s o d e 0 1 新たな任務（前書き）

再開、一話目です。

Episode 01 新たな任務

「はあああああ!!」

一人の青年が黄金に輝く剣を振るう、青年とは言っても未だに幼さを残したままの少年とも言えるような歳の男の子なのだが。

黒い瞳で黒い髪をした青年は白を基調とし青色のラインがいくつも入ったバリアジャケットに身を包み、剣を振るっている。

そして、彼が剣を振るっている相手は大きな魔獣だった。

グリフォン、世間一般では空想上にのみ生息する生物。

その空想上の生物と彼は、地球ではない、別の次元の別の世界の森で戦っていた。

青年とグリフォンの力は拮抗しているようで、青年は決定打を打ちこめなかった。

「このままじゃ、拉致があかない・・・真名解放

エクス

カリバー
「

青年が剣の名前を叫ぶと同時に青年の手の剣から大量の光が放たれる。

ただの光ではない。

高濃度の魔力を宿したその光はグリフォンを一瞬にして呑み込んで・
・

「フオオオオオオオオオオオ！！」

グリフォンを倒してしまう。

「大丈夫、殺しはしないよ。ほんのちよつと、羽を分けて欲しいだけなんだ・・・後できちんと治療するから、ごめんね」

青年、たかまかなで高町奏の目的はこのグリフォンの羽にあった。

このグリフォンの羽が今、この近くの村で流行っている伝染病を治すための特效薬には必要なのだ。

しかし、グリフォンは賢く強い、伝染病によって体力の落ちた村人達ではグリフォンの羽を手に入れることは不可能。

だから、村人達は管理局に頼みこんで来たのだ。

そして、奏が派遣された。

話しはそうだった。

「こちらも終わりました」

奏がグリフォンの羽を撮り終えた頃、奏の元に金色の髪に翠色の瞳で蒼い騎士甲冑を着た女の人が出て来た。

その女の人は騎士甲冑を着ているにも関わらず、思わず見とれてしまいそうな程、気品のある女性だった。

「梨桜、こっちも終わったよ。それじゃあ、グリフォンの治療をして村に戻るのか」

「はい」

そう言つて、グリフォンに回復魔法をかけて村へと戻って行く奏と梨桜。

「しかし・・・あのオイボレども・・・奏にもし、伝染病が移つたらどうする、つもりだったのでしょうか？」

少し怒りながら言う梨桜。

「仕方ないさ。高ランク魔導師で、なおかつ、伝染病などの病から自分の身を守るのは今の管理局には僕くらいしかないから、さ。これも人助けのためだから」

「しかし・・・奏はあのオイボレどもに優しすぎます。もう少し、

怒ってもいいと思います」

「そうかな？」

「そうです!!」

奏達にこの任務を押しつけたのは彼らの直属の上司にあたる、ミゼット・クローベルだ。

闇の書の事件の後から管理局で働くようになった奏だが、普通に入ったのではなく、三提督の直属になったのだ。

基本的にはミゼットから任務が言い渡されるが、一応、所属としては、三人の下となっている。

程なくして、村にいるにグリフォンの羽を渡し転移魔法で待たせてある次元航行艦へと転移する奏と梨桜。

転移した先に待っていたのは伝染病への対策として防護服に身を包んだ。

医師団だった。

その医師団の中に見知った顔を見つけると奏はその人に声をかける。

「久しぶり、シャマル、元気だった？」

「はい!!」

防護服に身を包んだ夜天の書の守護騎士の一人である女性は元気良

く、返事をした。

「奏君も元気そうで何よりです!!」

伝染病にかかっているかもしれない人間に言う言葉ではないのだが、そのところ、シャルは天然だった。

「それじゃあ、メディカルチェックを始めますから、あそこの部屋に移動してくださいね」

「分かった」

そう言っただけでスタスタと検査室に入って行く奏。

「えっと・・・梨桜さんは？」

「私はユニゾンデバイスなので、殺菌消毒のみで結構です」

「そうですか。分かりました」

そう言っただけで、そそくさと殺菌室に入って行く梨桜。

「・・・奏君に近づくには・・・障害となる人が多いな・・・でも、頑張ろう」

呟いたシャルの言葉を聞く者は誰もいなかった。

場所は医務室から変わって食堂。

二人の服装はバリアジャケットから、奏は管理局の制服、梨桜は黒のスーツへと変わっていた。

現在、二人は少し遅い昼食をとっていた。

と、言っても。

「奏・・・そんなに見られると・・・食べずらいです・・・」

既に奏は自分の分の食事を食べ終えている。

「梨桜が美味しそうに食べるから、嬉しくてね、つい」

「そうですか・・・つい・・・なら仕方ありませんね」

少し頬を赤く染めた梨桜だったが、食べることをやめる素振りは見せなかった。

ちなみに、現在、梨桜は定食のおかわりの五つ目を食べていた。

「しかし・・・管理局の時空航行艦の食事は言っでは何ですが・・・あまり、美味しくありませんね・・・早く、桃子のご飯が食べたいです・・・」

それだけ、食つといて、そんなことを言うな、という非難の視線が周りから降り注いだような気がしたが特に奏と梨桜は気にしなかった。

奏がそれなりの地位に着いているため、誰も文句を言えないのが本音だが。

「モグモグモグ・・・」

梨桜が定食の六つ目を食べ始めた時だった。

突然、艦内放送で奏が呼ばれる。

『高町二佐、連絡が入っております。至急、ブリッジまで起こしてください』

「奏、呼ばれてますよ」

「うん、そうだね」

ニコニコ笑顔で梨桜の食べる所を見ていた奏はゆっくりと立ち上がるとブリッジに向かう。

もちろん、梨桜に食べていて良いよ、という言葉を残すのも忘れずに。

本来なら絶対に着いて行く梨桜だが食事の時のみは別だった。

「分かりました・・・モグモグ・・・気をつけてくださいね」

「ありがとう」

ブリッジへと向かう途中に何人かの女性局員に話しかけられる奏だが、ブリッジに向かうために丁重にお断りするのだった。

「失礼します」

この時空航行艦の中で最も地位の高いのは奏なのでわざわざ、断りいれる必要はないのだが、このあたりのことはきちんとする奏だった。

ブリッジの正面の巨大なモニターには既に見知った顔の人物が回線を開いていた。

『お疲れ様、高町二佐』

そのモニターに映っている老人、ミゼットが口を開く。

「ミゼット提督でしたか」

『ええ。今回もなかなか大変な任務だったでしょう？』

「はい、それなりに」

『それでも、お疲れ様』

ミゼットはモニターの向こうで一切の笑顔を絶やさない。

（これは・・・僕に厄介事を押しつけて来る時の雰囲気だ・・・そろそろ、実家に帰りたいんだけどな・・・）

『それでお願ひがあるんだけど』

「・・・できれば、一度、実家に戻りたいのですが」

『・・・申し訳ないとは思っているのだけど・・・ごめん、ね』

苦笑いしてみせるミゼットだが、奏は知っている、これは余所行きの時の顔、つまり、ネコを被っている時のミゼットだ。

本音では申し訳ないなどとは一切思っていないということを。

「はあ、分かりました。それで、どんな案件なんですか？」

『話が早くて助かるわ。今度、また昇進の話を進めておきますね』

「・・・もう少し休みをくださるなら、ありがたい話なのですが、ね。昇進するにつれて、休みが減っているのは体が持ちませんよ」

『色々と検討しておくわ。じゃあ、特務の話しなだけで』

それを聞いた、この次元航行艦に乗るクルーは体を少し硬くし、明らかに緊張した様子だった。

管理局内で特務と呼ばれる仕事は稀だ。

基本的に管理局では百体の竜種を相手にする場合、二百人の魔導師を派遣する。

これが本来の普通の任務だ。

それに対して、百体の竜種を、たった一人の魔導師が相手にするのが特務と呼ばれる者だった。

並みの人間では成功不可能。

特務を成功できる人間は今、管理局に片手で数えられる程の人間しかない。

その一人が目の前にいる少年と言ってもおかしくないような子供が受けるのだ。

驚いたり緊張したりしないはずがない。

確かに、奏が特務をこなしている、という噂は管理局内にあるが、実際、奏と共闘などをした魔導師が少なすぎて、奏の実力があいまいため、誰も本気にしなかったのだ。

実際は合っていたのだが。

「それで、今回はどんな任務なんですか？」

次に口を開いた時のミゼットの顔は先ほどとは明らかに違い、真剣^{マジ}そのものだった。

『あなたがいる座標から、そう遠くない、次元世界で生物反応……いえ、人間の反応が一斉に消えました』

「数は？」

『……二万人です』

それを聞いて奏も先ほどの疲れた顔を消した。

それは間違いなく戦士の顔だちだった。

「僕と梨桜で向かいます。増援の期待は？」

『現状、Sランク以上の魔導師は全て別件で動いています。増援は期待できないでしょう』

「しかし、二万人以上の人間が消息不明になった以上、そんな流暢なことを言っていないでしょう？僕だけで捜査するよりも、もっと大人数で……」

『ごめんなさい。動かせないの』

ミゼットにそう言われて、奏は悟った。

「また、あの上層部が動いたんですか？」

『ええ、そうよ』

あの上層部とは、優秀な任務に着かせないでおこう、と考えている上層部だ。

現在、Aランクの魔導師でさえ、管理局には、一万人も満たない。数多の次元世界を管轄するにも関わらず、そんな現状だから魔導師を率先して優秀な魔導師は率先して教導官などの指導側に回そうとする派閥のことである。

別に奏も彼らのことが嫌いな訳ではない。

魔導師を駒としか見ていない上層部もいるなか、彼らは十分、マトモな部類である。

しかし

「二万もの人が消息を絶っているにも関わらず、魔導師の派遣を拒むとは・・・考えものですね」

『ええ、そうね・・・もう少しだけでも考え方を緩めてくれたら、かなりマトモな集団なんだけど・・・』

奏とミゼットは同時にため息を漏らす。

「気苦労が絶えませんね」

『本当よ、早くあなたが育ってくれて私達の立場を引き継いでくれる時を心待ちにしているわ』

「嫌です。丁重にお断りします」

清々しい程、満面の笑みで言う奏だった。

「奏？ここが、ミゼット達が言っていた世界なのですか？」

「・・・そのはずなんだけど」

口ごもる奏。

ミゼットから送られて来た座標を元に次元世界に降り立った奏と梨桜だったが、先ほどのグリフォンのいた世界と変わった様子のなど、見当たらない程、自然豊かでのどかな次元世界だった。

管理世界登録されていたので、てっきり、ある程度の文明がある、と予想していた奏と梨桜は少し肩すかしをくらってしまった感じた。

「これで、文明の急激な進化という線は消えたか・・・」

「はい。そう思います」

文明の急激な進化。

それは一見良いことのように思える。

しかし、その裏では確実に良くないことも起きる。

魔法や化学がその良い例である。

「誰かが介入したと見て間違いないね」

「・・・私もそうだと思いますが・・・一応、近くの村に行き生存者に事情を聞いてから決めることにしましょう、奏」

「そうだね。そうしよう」

そう言つて、ミゼットより送られて来た生存者情報を元に生存者のいるであろう村を目指す。

本当に二人が今、いる森は穏やかで時がゆっくりと流れるように感じる。

聞こえてくるのは川のせせらぎ。

木の葉を天高く舞い上がらせる、心地よい風の音。

自然を描いた絵画の光景をそのまま、切り出せば、このような風景だろう。

「おかしい」

奏の言葉に頷く梨桜。

「ええ、これはどう考えても、おかしいです」

「『動物』が一匹もないなんて」

そう、聞こえてくるのは自然の声のみ。

本来なら聞こえてくるであろう、動物の声が一切、聞こえてこないのだ。

それどころか、この森には

「探知魔法を使ってみましたが・・・半径三キロ以内に生物反応はありません・・・」

「分かった」

一切いなかった。

「今回の案件、僕達が思っている以上に難しい案件なのかもしれない・・・」

「ええ、そのようです。少なくとも私は人間だけならともかく、動物も全て消すことのできる魔法など知りません」

「うん・・・出来る限り、急ごう」

「はい」

二人はそう言ってバリアジャケットを展開する。

余談だが、奏は現在、梨桜というユニゾンデバイスしか持っていないため、梨桜にバリアジャケットを展開してもらっている。

そして、二人は飛行魔法を使い、村へと飛び立つのだった。

Episode 2 消失

「これは・・・」

梨桜が目の中の光景に絶句する。

奏は何も言わないが下唇を噛んでいる。

あまりにも目の前の状況が信じられないのだ。

ミゼットより指定された場所には確かに村があった。

それは問題ない。

奏と梨桜を唖然とさせている要因は・・・それは・・・服はあるのに村に人が一人もないことだった。

至る所に衣服が垂直に落ちたように靴の上に靴下、ズボン、シャツという順に落ちている。

まるで着けていた者の姿が忽然と消えて・・・そのまま落ちたかのようだった。

「一度、戻ろう、ここには手掛かりがなさそうだ・・・それに一度、ミゼットさんに相談した方が良い」

「そうですね。しかし・・・これは酷い。こんな子供まで・・・」

梨桜は未だに体温の少し残る子供服を持ちあげて呟く。

そう、未だに体温の残る衣服を、だ。

「奏！！」

梨桜が叫ぶ。

それと同時に奏に向かって、何かが向かってくる黒い色をした何か。

「
聖剣解放

竜を貫け！！ アスカロン！！」

奏は小さく呟いて、右手に紅い色の刀身をもった一振りの剣を作ります。

そして、襲いかかって来る物体に向かってアスカロンで迎撃する。

人ではないものを相手にする時、奏の使うアスカロンは絶大な力を発揮する。

もちろん、神話の関係上それがドラゴンなら、それは必殺の力を持つ。

しかし、今回に限ってはその限りではないようで、奏のアスカロンと黒い物体がぶつかり、ガキンという金属同士がぶつかったかのような音がした。

一端、黒い物体から距離を取り、梨桜の横まで後退した奏は再度、

自分のアスカロンとぶつかった何かを見た。

「・・・梨桜」

「・・・ええ。あれは犬のようですが・・・普通ではありませんね。私もあれからは生気が感じられません。それどころか、生物反応が一切ありません」

奏と梨桜の目の前には、漆黒の毛をたたせて、二人を睨んで来る一匹の犬らしき、ものがいた。

その体はまるで影が集合したかのような姿だった。

「・・・やっぱり、音が後ろから聞こえてくるまで、僕はまったく気づけなかったから・・・梨桜が名前を呼んでくれていなかったら、どうなっていたことが」

「仕方ありません。あのような存在・・・見たことも聞いたこともありませんから。どうしましうか、奏。一度、帰還しても誰からも文句は言われないでしょうけど」

「間違いなく、あれと人や動物が消えたことは関係している。あれから話を聞けるとは思えないけど・・・」

「奏なら、そう言うと思いました。私が前衛で戦います。奏は後衛からの援護で」

「ダメだ」

梨桜の言葉を軽く切り捨てる奏。

「え？」

「あれは僕が相手をするよ。何か得体の知れない力を感じる」

「しかし・・・それなら、やはり、私が行った方が・・・」

「僕は梨桜に傷ついて欲しくないだけだよ。それに・・・向こうも僕を指名したみたいだよ」

一匹の犬らしきもの・・・いや、体の大きさからして狼と言っても違和感がないそれが奏めがけて走りだしていた。

「僕があれを捕獲してくるから、その間に周りを警戒しつつ、転移魔法の準備を」

「・・・分かりました」

渋谷といったような風に梨桜はそう言ったが、頬は僅かに紅くなっていた。

「じゃあ、高町奏・・・参る!!」

ドンという大きな音を立てて地面を蹴った奏はすぐに犬らしき者を斬れる間合いに入る。

そして、数年前にはできなかった強力で鋭い突きを放つ。

先ほどは不意打ちへの迎撃で完全に力がのせ切れていなかったが今回は違う。

自分からも攻めているから。

「はあああ!!」

飛びかかって来た犬の腹を貫くかに見えた。

が

「っ!？」

貫くどころか向こうまで突き抜けてしまった。

それは奏の突きが強力だったからではない。

犬の腹がまるで奏のアスカロンを避けるかのように穴が開いたのだ。

奏の攻撃は犬には当たらなかったが、犬の攻撃は違う。

犬に攻撃が当たり吹き飛ばせると思っていた奏は一瞬だけ回避行動が遅れてしまう。

犬の爪が一気に奏の顔に近づく。

「奏!!」

梨桜の叫び声が村に響く。

(温存する必要はない・・・か)

犬の爪が奏の頬をかすろうとした時だった。

奏の視界がモノクロ、つまり白と黒だけの世界に変わる。

そして、世界はスローモーションになる。

動きが遅くなった犬の爪を後退し回避して、今度こそ、犬の腹をアスカロンで切り裂く。

「御神流奥義『神速』」

奏の世界はまた色を取り戻し正常に動き出す。

そこで、再び、犬からの爪が奏にまた襲いかかる。

バックステップで一気に犬から距離を取る奏。

「どうなった？」

「・・・奏のアスカロンは確かにあれを斬りましたが・・・まるでスライムのようにすぐにくっ付きました・・・魔力の流れに変な流れが見えませんでしたので、恐らくあの犬の希少技能^{レアスキル}かと」

「・・・まだ、断定はできないけど、あれの捕獲は難しいね」

「・・・はい。斬ってダメなら魔力ダメージでノックダウンですが、魔力が効くか、どうか分かりません」

「仕方ない、本気で倒すよ。そうじゃないと、こっちが危ない」

「はい。今回はそれが得策です」

梨桜への確認を取った後、すぐに奏はまた、神速へと入る。

そして、アスカロンに魔力を集中させる。

そのことによって、紅い魔力の奔流がアスカロンを包み込む。

「はああああ!!」

そして、犬の化け物に一撃を叩き込む。

突きは特殊な交わされ方をしたので突きではなく、薙ぎ払うかのような太刀筋。

切り裂かれた犬はまた、体の斬られた部分を繋ぎ合わせて、元に戻ろうとするが。

「甘い」

奏のアスカロンから続けざまに斬激を受ける。

すると

「オオオオオオオオ」という雄たけびをあげながら、消えていった。

そう、まるでこの世界から消えるかのように体が塵のようになって。

「・・・これは」

「分かりません。恐らく、一定のダメージを越えると消えるように設定されていた、というのが正しいかと」

「そっか」

「奏、今回の件は一度、本部に帰りミゼットに相談した方が得策かと・・・もしかしたら無限書庫か何かに似たようなケースの情報があるかもしれませんし・・・それに言いにくいのですが・・・おそらくこの世界には、生物は残っていません」

ですから、これ以上、被害が増えることはありません。

と、続けたかった梨桜だが、それは言えなかった。

もし、自分達がもう少しだけでも早く到着していたら、自分が持つ服を着た少女は助かったかもしれないから。

「うん、梨桜の言いたいことは分かるよ・・・でも、ね。それは梨桜が悩むことじゃないよ」

「・・・奏」

「確かに僕達が早く来ていれば助けられたかもしれない。でも、それは・・・」

「分かっています」

後悔しても、救えなかった事実は変わらないから。

それなら、今後、被害を増やさないように努力した方が良い。

薄情かもしれないが・・・奏と梨桜はそう考えるようにしていた。

それは二人が数多くの人間の死を見て来た結果からの考えだ。

「それに、まだ彼らが死んだと決まった訳じゃないから」

「・・・そうですね」

彼らを救える方法を探そうよ、と言葉を続けた奏だった。

その後、奏と梨桜は次元航行艦に転移したのだった。

『・・・そう、分かったわ』

今、奏と梨桜は先ほどの一件の詳細をミゼットに話していた。

『こちらで、何か分かり次第、あなたに連絡を取るから一度、ミッドに戻ったら実家に戻りなさい』

「しかし・・・」

奏は否定の言葉を口にする。

それを聞いたミゼットは

『はあ、奏君、確かにあの世界の人々の事が気になるのも分かるけど・・・あの、ね。あなたに何ができるの？ あの世界で色々調べるにしても、その黒い犬のような生物の内部構造をあなた達では調べられない。それなら他の人に頼むしかないじゃない？』

「そうですが・・・」

『それに、あなた達にはその対処方法は倒す以外なかったんでしょ？ だから、諦めなさい』

モニター越しのミゼットは少し苦笑していた。

あれほど、休暇が欲しいと言っていた少年が人の命が関わると知った途端に動きたくて仕方ないといった言葉を発しているのだ。

『奏君』

「分かっています・・・でも、何かしたいと思うじゃないですか」

『今は休みなさい。休むことも仕事の内だから。何かあったらすぐに連絡するから、ね』

そう言い残し、ミゼットは通信モニターの電源を切った。

おそらく、すぐに他の二人に連絡を取り、今後の対策を取るためだろう。

ことの顛末を横で聞いていた梨桜は

「奏も私と同じですね、私には先ほど、説教をしたのに」

と、軽く笑った。

「む、梨桜だつて動きたくて仕方ないって顔をしているじゃないか」

「だから、私と同じだと言ったのですよ」

と、再び笑った。

そんな時、一人の管理局員が部屋の中に入って来た。

「失礼します。天童二佐、検索の結果が出ました。あの世界には、もう、天童二佐達が戦った、犬のような生物は確認できませんでした」

それだけ言つて出て行く、局員。

それを聞いて不服な顔をする奏に梨桜は

「これで、本当に私達にできることはなくなつてしまいましたね・・・」

と、苦笑するしかなかったのだった。

Episode 02 消失（後書き）

Episode 03は2月28日の更新を予定しています。

予告

『ショートケーキ・・・チョコレートケーキ・・・チーズケーキ・・・モンブラン・・・ジュル・・・待っていてください。すぐに、こんなどうでも良い書類の整理を終わらせて迎えに行つてあげますからね。』

「・・・姉さん・・・ごめん」

「・・・私も、驚いて・・・悲鳴をあげちゃつてごめん・・・」

「に、兄さん・・・」

「奏・・・」

「何か言い残したいことはあるか？」

「・・・いえ、ありません」

「では」

「では？」

「死ね！！」

Episode 3 お風呂パニック

「ただいま」

奏の声が自宅に響く。

しかし、返事はない。

それもそのはず、現在は水曜日の正午を少し回った頃。

普通の人間なら会社あるいは学校に言っているだろう。

奏はそのまま、手を洗い奏に割り当てられている自室に向かう。

彼のパートナーである二人は今はいない。

梨桜はミッドに戻ると奏に「先に地球に戻ってください。私は色々と書類の整理をしてから帰りますので。ちなみに、反論は一切受け付けません」と、とても良い笑顔で言っ地球に奏を先に返した。

もちろん、反論しようとした奏だったが、梨桜の笑顔に押されて何も言えなかった。

もう一人は姉妹達と一緒に別の任務についている。

自室の扉を開けると、簡易ベッドに年季の入った勉強机と空きがかなりある本棚があるだけの小さな部屋が広がっていた。

旅行用の鞆をドンという音を立てて床に置いて、一度、ベッドに寝転がる奏。

思いだすのは、数刻前までいた世界のことだ。

もちろん、考えても意味がないことは分かっている。

それでも考えてしまう。

「どうしようもないことで悩んでいる僕って馬鹿だな・・・」

その呟きを返してくれる人はこの場にはいない。

時刻は正午を少し回った頃。

奏の部屋は日当たりが良く心地よい暖かさで包まれている。

「・・・寝よう」

瞳を閉じて思考を手放し体から力を抜く。

奏が規則正しい寝息をたて始めるまで二十分はかからなかった。

【IN 梨桜】

奏と別れてから私は一度、時空管理局の本局の奏に割り当てられた部屋で書類の整理をしています。

本来なら、奏がやるべき仕事なのですが、ほっておくと奏は毎日寝ないで仕事をしてしまうので、定期的に私が変りに仕事をします。

もちろん、奏に聞かなければいけない書類は残して後日、奏にしてみらいますが。

そうこうしていると、扉を誰かが叩く音がした。

「どうぞ」

そう、特に気にせずに返事をする。

「ハロ〜〜〜梨桜ちゃん、頑張ってる？」

入って来たのは薄い緑色の髪をして将官の服を着た統括官であるリンディ・ハラウンだった。

彼女は奏の友人のフェイト・T・ハラウンの養母だが、私は彼女に気を許していない。

彼女は食えない。

「どうしたのですか？ハラウン統括官」

私が無愛想に答えたのにも関わらずリンディ・ハラオウンは特に気にした様子もなく、ズカズカと部屋に入って来て奏が置いてあった、それなりに高価なソファーに腰掛ける。

「いえ、特に用事があつた訳ではないわ。あなたとお話したかった、と言つたらダメかしら？」

「嘘ですね。ハラオウン統括官が打算なく私に近づくはずがない」

私が断言したのにも関わらずリンディ・ハラオウンはまったく笑顔を崩さない。

これだから、この人が何を考えているか、まったく分からないのです。

「厄介な事件を抱えていると聞いて、手伝えることがあるかと思つてね」

自分に都合の悪い話題はすぐに変更する。

これが彼女が人と話す時の技法なのでしょう。

「ええ、そうですが、あなたに手伝えることなど、ありませんよ。こちらの人員を削つて奏に負担ばかりかける、あなたには」

これは本当だ。

本来なら、SSランク魔導師である奏が受けるべきではない任務も彼女は奏と顔見知りということで依頼して来る。

本来、奏は三提督の直属となつていたので、受ける必要はないのですが、なのはやフェイトの名前を出されると奏は受けない訳にはいかなくなる。

それを見越してやってくるのだから、性質が悪い。

「・・・私も悪気があつて・・・奏君に任務をお願いしているのではないんだけど・・・」

「言い訳ですね」

私の言葉を聞いて言葉に詰まる、リンディ・ハラオウン。

これで話の主導権は完全に私が握りましたね。

「それで、今回の本当の目的は何ですか？嘘をつかれても困りますので、はっきりと言ってくださいね」

「・・・ちよつと、厄介な案件があつて」

やっぱり、またですね。

「先程、リンディ統括官が仰られた通り奏は今、厄介な案件を抱えています。その奏にあなたはさらに、重荷を持たせるのですか？子供を潰す気ですか？」

「でも・・・それだと、なのはさんとフェイトさんに頼むしか・・・」

「また、それですか？あなたは子供を何だと思っているのですか？」

殺戮兵器ですか？なのはちゃんもフェイトちゃんも子供です。本来なら、もっと仕事を減らしてあげても良いくらいなのですよ？」

「管理局は・・・人材不足で・・・」

「ミッドの地上はもっと、人材不足ですよ。本局のあなた方が引き抜くから」

「それとこれとは・・・」

「話が別ですか？ちなみに、なのはちゃんかフェイトちゃんにその案件を回したことが分かった場合、三提督に今までのことを報告させてもらいます」

「そ、それは・・・」

「何か問題でも？あなたが奏の姉とその親友をだしにして無理矢理、奏に任務を回していただけではないですか？」

「分かったわ・・・今回の案件は私達で処理します」

「そうですね。子供をワカーホリックに教育するようなことのないようにお願いします」

「私はこれで失礼するわ」

「ええ、紅茶も出せずに申し訳ありませんでした、ハラウン統括官」

彼女はあきらかに残念そうに肩を下ろして部屋を出て行く。

が、私はまったく後悔はしていない。

彼女は子供を大人と同じように自分の都合の良いうに扱うような癖がある。

そのような大人に気を使う程、私はできてはいませんよ。

さて、手を止めていた書類の整理を再び始めますか。

今日はなかなか、気分が良い。

この後、ホテルのケーキバイキングでも行きましょうか。

奏から、おこずかいは、たくさんもらっているので、問題ありません。

ショートケーキ・・・チョコレートケーキ・・・チーズケーキ・・・
モンブラン・・・ジュル・・・待っていてください。

すぐに、こんなどうでも良い書類の整理を終わらせて迎えに行つてあげますからね

【END】

「ふわわ〜」

時刻は午後四時前、奏は眠りから目を覚ました。

大きく手を上に伸ばして、寝汗をかいてしまっていたのでシャワーを浴びるべく、お風呂場にタオルと着替えを持って向かう。

未だにきちんと意識が覚醒していないのか、奏の足取りは少しふらふらしていた。

そして、水の音が聞こえるにも関わらず、脱衣所の扉を開けてカッターシャツを脱ぎ、洗濯物をいれる籠に入れる。

そして、タオルと着替えを置きお風呂の扉を開ける。

そこには・・・

「え？」

普段は茶色の髪をサイドポニーテールにして髪をくくっているが現在にはストレートにしている生まれのままの姿をしている・・・奏の姉である・・・なのはが・・・そこに立っていた。

「・・・なのは姉さん？」

「・・・ほえ？・・・奏、なんでいるの？」

「・・・ちよつと前に帰って来てたんだ・・・それで・・・ちよつと・・・昼寝しちゃって・・・それで・・・寝汗をかいたから・・・ちよつとシャワーを浴びようかと」

「そうだね・・・シャワーを浴びないと・・・風邪ひいちゃうね・・・て・・・奏・・・が裸・・・私も裸？・・・きゃあああああああああ！！！」

「ご、ごめん！！！」

急いで扉を閉める・・・奏。

覚醒していなかった奏の意識は、なのはの悲鳴を聞いて完全に覚醒した。

例え、姉である、なのはとはいえ、女性の全裸を見たことがなかった奏は少々、どころか、かなりうろたえていた。

そんな中、お風呂の中にいる、なのはから声が聞こえて来た。

「・・・奏」

「・・・姉さん・・・ごめん」

普段は年齢の割に落ち着いている奏だったが、この時ばかりは声がいつもより少し高かった。

「・・・私も、驚いて・・・悲鳴をあげちゃってごめん・・・」

「いや、なのは姉さんは何も悪くないから・・・ろくに確認もせず

にお風呂の扉を開けた僕の方が悪いから」

「それで、ね」

「何？」

「そろそろ、私、出ようと思ってただけだね」

「うん、それなら僕はすぐに外に出るから、ちょっと待って」

「違うの・・・奏さえ・・・良ければ・・・良ければ・・・なんだけどね」

「うん」

「い、一緒に入らない？ほら、昔、子供の時はよく、一緒に入ってたし」

その言葉を聞いた瞬間、奏の時間は止まった。

別に姉が姉弟らしからぬ発言をしたからではない。

今、目の前に自他共に認めるシスコンである恭也、高町恭也が目の前にいることだった。

先ほどの発言をもちろん、恭也も聞いている。

今更ではあるが、月村忍さんと婚約して、海外での仕事を覚えるために海外に行っているはずの恭也がなぜ、今日に限って実家に帰って来ているかは分からないが・・・一つだけ言えるのは・・・

「に、兄さん・・・」

「奏・・・」

恭也は不気味な程に良い笑顔をしている。

そう、不気味な程。

「何か言い残したいことはあるか？」

「・・・いえ、ありません」

「では」

「では？」

「死ね！！」

どこからともなく取り出した木刀で奏の頭を狙って来る。

「兄さん！！今は死ぬ！！」

「問答無用！！」

必死の思いで脱衣所から逃げる奏。

それを鬼の如く鬼神をも思わせる程、恐ろしい顔で追い掛ける恭也。

もちろん、奏は全裸である。

その地獄の鬼ごっこは、奏となのはの姉で恭也の妹である美由希が帰って来るまで続けられたのだった。

【INなのは】

私はいつもと同じように中学校に行った後、管理局の仕事が今日 wasn't だったのでそのまま真っ直ぐ家に帰りました。

本当なら親友のアリサちゃん、すずかちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんと何処かにお出かけしたかったんだけど・・・四人共、今日は用事があるからダメだった。

「それにしても・・・奏は今日も帰って来てないの・・・」

家に人が動いている気配がまったくしなかったので、私はそう判断した。

奏とは私と同じ年の私の弟。

本当にすっごく可愛くて・・・カッコ良くて・・・誰にも渡す気はないの！！

お姉ちゃんが全力全開で守ってあげるから、お嫁になんて行かさないのー！！

と、今日は体育が六時間目に合ったからちよつと汗をかいたから先にお風呂に入っちゃおう。

お兄ちゃんは、いつ帰って来るか分からないし。

美由希お姉ちゃんはお店のお手伝いがあるし。

お父さんとお母さんは翠屋の営業時間が終わるまでは絶対に帰ってこないし。

だから、私は特に気にせずに脱衣所のドアのカギをかけずにシャワーを浴びて汗を流す。

「ルン~~~~ルン~~~~ルン」

管理局で働くようになってから、最近、流行りの音楽とかは分からないけど奏と昔、良くカラオケに行った時に二人で歌っていた歌のメロディーを口ずさみながら体を洗う。

・・・体育の着替えの時間に思っただけど・・・フェイトちゃんの胸は反則だと思う。

だって・・・歳も同じくらいで・・・食べている物も特に変わらないのに・・・物凄く、大きくて・・・柔らかいし・・・。

あ、もちろん、私は揉んだことないから分からないよー！！

はやてちゃんがそう言ったの。

って、私は誰に言いわけしてるんだろ。

体を洗い終えた私はお風呂に備え付けられている椅子に座って髪を洗い始める。

どうして男の子が、あんなに早くお風呂に入って出てこれるか奏と昔（四歳くらいの時）、入った時に分かったんだけど、男の子って髪を洗う時にシャンプーを一回するだけで終わりなの。

「なんで、あんな簡単に終わらせるんだろ？」

女の子の私は髪を傷つけないように丁寧に洗っていく。

そして、仕上げにリンスをつけて少し間、半身浴。

この半身浴ってダイエットになるって聞いたけど、本当かな？

アリスちゃんが目を輝かせて話を聞きに行ってたけど。

十分程、経った後、私はリンスを髪から落とし、湯船につかる。

「う~~~~ん、生き返る~~~~」

管理局の仕事のある時は、こんなにゆっくり入ってられないから今日は思いっきりお風呂を満喫しようつと

時々、お風呂の存在しない次元世界があるからびっくりするよ。

それも体もタオルなんかで拭くだけで終わりだし。

その世界の独特の文化だって言われたら、それまでだけど。

だから、出来る限り、今、この瞬間に入浴を楽しむことにする。

それから十分位、湯船につかったのかな？

正確な時間は測ってないから分からないけど。

私は最後に軽くシャワーを浴びてタオルを取るべく扉を開けると・
・そこには・

「・・・なのは姉さん？」

そこには、帰って来ていないはずの弟の姿があった。

「・・・ほえ？・・・奏、なんでいるの？」

「・・・ちよつと前に帰って来てたんだ・・・それで・・・ちよつと・・・昼寝しちゃって・・・それで・・・寝汗をかいたから・・・ちよつとシャワーを浴びようかと」

「そうだね・・・シャワーを浴びないと・・・風邪ひいちゃうね・・・て・・・奏・・・が裸・・・私も裸？・・・きゃあああああああああー！」

どうしよう、どうしよう、どうしよう、どうしよう、か、か、か、奏に裸を見られちゃったよー！！

別に嫌ではないけど、だけど、だけど・・・。

「う、ごめん!」

そう言っただけで、すぐに扉を閉める。

「・・・奏」

私が奏の名前を呼ぶと

「・・・姉さん・・・ごめん」

奏の動揺した声が返って来た。

やっぱり、奏も私のことを女の子として意識してくれてるのかな？

「・・・私も、驚いて・・・悲鳴をあげちゃってごめん・・・」

「いや、なのは姉さんは何も悪くないから・・・ろくに確認もせずにお風呂の扉を開けた僕の方が悪いから」

「それで、ね」

「何？」

「そろそろ、私、出ようと思ってただけだね」

「うん、それなら僕はすぐに外に出るから、ちょっと待って」

これって、皆と差をつけるチャンスだよ、ね。

「違うの・・・奏さえ・・・良ければ・・・良ければ・・・なんだけどね」

「うん」

「い、一緒に入らない？ほら、昔、子供の時はよく、一緒に入ってたし」

顔が真っ赤になるのが分かる。

真っ赤になるなら言うなって怒られちゃいそうだけど・・・でも、でも、でも。

でも、いつまで経っても奏から返事は返ってこなかった。

不審に思って服を着てリビングに向かって見ると・・・そこには、お兄ちゃんに追いかけられる奏の姿があった。

【END】

散々な目にあつた。

それだけは確かだった。

なのは姉さんとお風呂ではち合わせたのは僕が悪いにしても、恭也兄さんに追いかけて回されるのは完全に予想外すぎた。

なんとか、美由希姉さんが今回は助けてくれたけど、たぶん、次はないと思う。

今は、その話をしつつ、皆で夕食を食べている。

翠屋の閉店時間後なので、それなりに時刻は遅い時間になってしまっているけど、高町家では父さんと母さんが決めたことなんだけど、できる限り皆で一緒に夕食をとるようにしている。

「それにしても、恭也何で急に返って来たんだい？」

父さんが恭也兄さんに質問する。

うん、それは僕も知りたい。

「向こうでの仕事が一段落したから一度、家に戻って来いと、忍に言われたんだ」

「忍さんに？」

「そうなんだ、俺も意味が分からないんだが・・・」

父さんと恭也兄さんが首を傾げて疑問を口にする。

「はあ、きょうちゃん・・・何で忍さんにそう言われたか分からないの？」

先ほど、僕を助けてくれた美由希姉さんが呆れたように言う。

「なんだ、美由希、おまえなら理由が分かるのか？」

「・・・シスコン」

「は？」

「だ・か・ら！！ きょうちゃんがあまりにも、なのはの話を毎日、忍さんに話すから忍さんが気をきかせてくれたの！！」

「そんなはずないだろう！！」

結構強く、反論する恭也兄さんだけど・・・

「私、忍さんとよくメールするんだけど、きょうちゃんは、私という時、一日一回はなのはの話をするってメールに書いてたよ。普通、婚約者に毎日、自分の妹の話ししないでしょ？」

「うつ」

恭也兄さんのなのは姉さんに対するシスコンは今に始まった事じゃないからな・・・

「これからは気をつけなよ、きょうちゃん」

「そうだよ、お兄ちゃん。それに私の話しばっかりしてるって恥ずかしいよ」

諭すように言う美由希姉さんに対して、なのは姉さんは顔を赤くして少し恥ずかしそうだ。

・・・でも、まあ、自分の話を自分の知らない所でされてたら・・・恥ずかしいか。

「そうね、恭也、美由希となのはの言う通りよ。気をつけなさい」

そう母さんが締めくくってこの話は終わりを迎えた。

・・・恭也兄さんが小声で「なのはの事を話さないなんて・・・死ぬかもしれない・・・」と呟いていたのは聞かなかったことにしよう。

うん。

Episode 3 お風呂パニック（後書き）

次回の更新は3月の12日を予定しています。

次回予告

「お医者様が言うには、今年の暮れ位には生まれるらしいわ。もう母様のお腹の中で暴れてるくらいだから絶対元気な子よ!!」

「そうなんだ、僕もアリサの弟が生まれるの楽しみにしてるんだ」

「な、なんで、あんたが楽しみにしてるのよ」

「だって、アリサと同じできつと可愛い子だろうから」

「うっ!？」

Episode 4 それぞれの進路

『奏、こちらでのデスクワークは終わりましたので、私は昼ごろにはそちらに合流できると思います』

「任せちゃって、ごめんね」

現在の時刻は八時。

そろそろ、学校に向かわないといけない時間なんだけど男の俺と違って、なのは姉さんの準備は時間がかかるのでそれを待っている間に梨桜にデスクワークの進み具合を通信で聞いていた。

『いえ、奏は学生なのでから学業の方を優先させてください』

今回に限った話ではなく梨桜は僕のすべきデスクワークのほとんどを肩代わりしてくれている。

もう一人のパートナーである『桔梗』も肩代わりしてくれているけど、現在、桔梗はヴォルケンリッターの補助で長期任務に出ている。

だから、ここ最近是完全に梨桜に任せていると言っても過言ではない。

「ありがとう、そろそろ、行く時間だから」

『ええ、気をつけて行ってきてくださいね』

そう言って、なのは姉さんの部屋の前で鞆を持って待つこと、五分。

「奏~~~~ごめん」

なのは姉さんが部屋から出て来た。

髪はいつもと同じようにサイドポニーにしている。

そういえば、いつからサイドポニーに変わったのかな？

いつも一緒にいるのに、いまいち思いだせない。

それよりも今は

「姉さん、ちょっと後ろ向いて」

「ほえ」

なのは姉さんは首を傾げるだけで、まったく後ろを向いてくれないので、仕方ないので自分で姉さんの後ろに回る。

そして、制服のポケットにいつも入っているくしを使って姉さんの寝癖を直す。

もちろん、きちんと『前』はきちんとできているんだけど、時々、後ろの方の髪がたっていることがあるんだ。

「あ、ありがとう、奏」

「うん、それじゃあ、行こうか」

「うん」

そう言つて、腕を組もうとする姉さん。

「姉さん、それは歩きづらいから、やめて」

「え〜〜〜」

「それに早くしないと遅刻するよ」

「ぶ〜〜〜分かった」

頬を膨らませて拗ねる姉さんだけど・・・まあ、仕方ない。

「なのは、奏、八時十五分よ」

リビングの方から母さんの声が響いてくる。

「姉さん」

「奏」

「「走ろう」」

二人で一斉に駆け出す。

目指すはバス停もとい、アリサの車！！

「もう、またあの二人時間の通りに来ないんだから!!」

一代のリムジンの中で一人の少女が怒っていた彼女の名前はアリサ・バニングス、なのはと奏の幼馴染兼親友の少女である。

「そうだね。なのはちゃんは奏君がいると・・・いると・・・甘えて・・・うふふ」

怒ったアリサをなだめた後に少し影のある笑みをうかべた少女は月村すずか、この少女もアリサと同じで二人の幼馴染兼親友の少女である。

「す、すずか・・・怖いわよ」

「うふふ」

（やばいわ・・・早く奏に来てもらわないと・・・でも、本当にアイツという時のなのはは仕度に時間をかけるからな・・・）

そんなアリサの密かな思いとは裏腹にすずかの笑い声が社内に木霊するのだった。

それが十分程、続いた頃だろうか。

「はあ、はあ、はあ、ごめん、二人共」

二人が待ち望んでいた少年が到着した。

「奏君　私達は全然待つてないよ」

いつの間にか車の外に出ていた、すずかが奏に抱きつく。

「すずか!？」

「はい」

そんな光景を見てアリスは少しだけムスツとする。

「奏!!　何で遅れて来るのよ!!」

「う、ごめん・・・」

素直に頭を下げる奏。

（うつ、そんなにあっさり謝られると、まるで私が奏を虐めているみたいじゃない）

「そ、それで、なのは!？」

「あ、姉さんなら」

すずかを少し自分から引き離して後ろの曲がり角を指差す。

すると

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・か・・・なで・・・ま・・・ま
って」

息を切らして、ゆっくりと歩いて来るなのは姿が見えた。

「はあ、奏、あんた、どれくらいの速度で走って来たのよ、なのは
も昔に比べたら走るの早くなったのにそれが、あんなに疲れきるな
んて」

「うーん、僕が朝、ジョギングで走る速度かな」

「・・・あんた、それって三キロを十分のペースで走るって言うて
なかったけ？」

「うん、そうだけど」

「・・・そりゃあ、なのはもへばるわよ。例え、あんたが鞆を持っ
てあげても」

アリスの目線の先の奏の手には二つの鞆が握られていた。

「そんなことより、アリスちゃん早く行かないと遅刻するよ」

「・・・そうね。ほら、なのは、そんな所でへばってないで車に乗
りなさい。行くわよ」

「ま、待ってよ~~~~」

「ほら、姉さん肩に捕まって」

奏がそう言つと

「早く、車に乗りなさい!」

顔は笑っているのに目は一切、笑っていないアリサとすすかの笑顔がなのはを突きさすのだった。

【INFエイト】

「じゃあ、言ってくるね、アルフ」

「行つてらっしゃい、フェイト!」

私は子供versionになったアルフに見送られて中学校に向かう。

時刻は八時。

家を出る時間にしてはまだ、早い方だ。

でも、今日は奏が登校して来る、そうなのでいつもより少しだけ早く学校に向かうことにしたんだ。

え？

なんで今日、奏が学校に来るって分かるって？

昨日、たまたま、奏とメールしてて・・・してて・・・えへへ、教えてもらったんだ。

今日は私も執務官見習いの仕事がないので一緒に授業を受けられるんだ。

あ、一応だけど、執務官試験には合格しました。

二回落ちちゃったけど、ね。

三回目で何とか。

でも、執務官って試験に合格しても、すぐに執務官になれるんじゃないくて、何年か他の執務官の元で研修をして初めて執務官になれるんだ。

私の場合はお兄ちゃんであるクロノ・ハラオウンの所で研修をしています。

そういうば、たぶん、奏となのははギリギリの時間に出てアリサとすずかの車に乗って行くんだろうけど、私は四人と一緒に学校に行きません。

朝の学校までの道って色々な人に会えて楽しいんだよ。

猫ちゃんに会えたり、お婆ちゃんとお話したり。

アリスとすずかはお嬢様だから気軽に歩けないんだろっけど。

いつもと、ちょっと違った道を歩いて学校の門の前に着く。

「フェイト先輩、おはようございま〜〜す」

「うん、おはよう」

私達は部活に入っていないから何かを指導したことはないんだけど、運動会の時とかに知り合った後輩の子達は皆、私達に気軽に話かけてくれるんだ。

嬉しいな

そして、教室に向かうと、親友が話しかけて来てくれた。

「フェイトちゃん、今日はいつもより来るの早いな〜〜あ、奏君が登校するんやな」

「は、はやて、奏は関係ないよ」

「ふふ、やっぱり、そうなんやな」

う〜〜はやてが意地悪だ。

親友の中ではやては唯一、奏のことが好きじゃない。

かといって、私達を応援することはない。

なぜなら、家族であるシャルさんを応援すると公言している。

「それで、アリサちゃんもすずかちゃんも今日は来る時間が遅いんやな」

「・・・そうだね」

時刻は八時二十五分、そろそろ来ないと遅刻になってしまう。

そんな時だった。

「おはよう」

そう言って一人の男の子が教室の中に入って来た。

それに私はいち早く声をかけようとする。

でも、いざ、声を出そうとすると案外出ないもので。

「おはようさん、奏君」

私よりも先にはやてが教室に入って来た男の子、奏に声をかける。

うっっ私に先に言いたかったのに。

「おはよう、はやて、それにフェイトも」

「お、おはよう、奏!!」

「朝から元気だね。フェイトは」

私に頬笑みかけながら、そう言ってくれる。

嬉しいな、朝から奏と話せて。

「あれ？ 奏君、なのはちゃん達は？」

「姉さん達なら、たぶん、そろそろ・・・」

「なのは!! あんたいい加減一人で歩きなさいよ!!」

「にやはは・・・ごめん無理」

「アリサちゃん、もうすぐだからね」

なのはがずかたアリサに肩を貸してもらいながら、歩いて教室に入ってきた。

「どないしたんや、なのはちゃん」

「聞いてよ、はやて、なのはったらね。遅刻ギリギリになったから奏と同じペースで私達と待ち合わせしてた場所まで来てね、それで!!」

「はい、はい、それで分かったわ。どうせ、奏君に置いていかれへんように全力疾走で走ったわ、ええけど、なのはちゃんは体力を使

いきつてしもたから、車から降りられへんかった。それで奏君が肩を貸そうとしたから二人が代わりに肩を貸したげてるんやろ？」

「そうよ、よく分かったわね、はやて」

「いつもの事やろ？ ほら、ちゃっちゃと、ダメな姉を席につけたり、しんどそうやで」

「そうね」

「ごめんね、二人共」

なのは・・・ご愁傷様、苦笑しかできないよ。

「ところで二人の方は、ちゃんと学校に来れてるの？」

「ボチボチやな、私の分の仕事はシグナム達がフェイトちゃんの事はクロノ君が肩代わりしてくれてるから問題ないわ。一番きついのが、なのはちゃんやろ、戦技教導隊は本人が出なあかんからな。せんぎきょうどうたいまあ、そのなのはちゃんも、なんとか大丈夫やろ。このクラスで一番休んでるのはその弟やから」

「あはは、それを言われるとつらいところだよ」

た、たいへんだよ。

はやては奏と自然とお話できているのに私は全然できてないよ。

私も何か話さないと！！

「か、奏!!」

「どうしたの? フェイト」

「あのね!!」

「うん」

私がお口にしようとした時だった。

『キーン・コーン・カーン・コーン』と、チャイムの音が教室に響く。

「ごめん、フェイトまた後で」

「う、うん」

う~~~~私もお話したかったよ~~~~。

【END】

「それで、あんたは進路どうするのよ」

時刻は十二時を少し回った頃、奏、なのは、フェイト、アリサ、すずか、はやては屋上で昼食をとっていた。

その時にふと思い出したかのようにアリサが奏に質問する。

「この間の進路調査書の話し？」

「そうよ」

奏達は未だに最高学年の三年生ではない。

しかし、奏達の通う学校は私立であるため、そういったことの調査などは二年生から求められる。

「うーん、今のところは就職かな」

「やっぱり、奏君は管理局に入っちゃうんだ・・・」

本当に残念そうにそう言うすずか。

それに奏は困ったような顔になった。

「それで、奏はともかく他の三人はどうなの？」

奏があまりにも答えづらそうにしていたのでアリサが他の三人にも話をふる。

「にやはは・・・私達も一応、奏と同じで就職かな」

「そやね・・・ホンマやつたら、もう管理局に入ってもええくらいやし・・・」

「うん・・・私も研修期間が終わって本格的に執務官として働けるようになるから」

それに、なのは、はやて、フェイトも答える。

それを聞いて分かりきっていたはずなのに、幼馴染六人の内、四人が卒業と同時に就職して違う世界に行ってしまう。

残される者にとっては寂しい、と思わないはずがない。

しんみりとした雰囲気は屋上に流れる中、口を開いたのは奏だった。

「大丈夫。進路でバラバラになったとしても、僕達が親友だっていう事実は変わらないし、僕達の思いも変わらない、それに、今は未来のことを考えるよりも今を楽しもうよ」

「・・・っ！？」

奏の言葉と屈託のない笑顔に四人は同時に顔を赤らめる。

一人、顔を赤らめていない、はやては

（奏君の言う通りやな、将来のことを考えるよりも今を楽ししも、か・・・まあ、今の言葉と奏君の笑顔が三人にとっては最高の思い出の一つになるんやろっけど）

「そ、そういうね！！ 将来なんて、まだまだ変わるかもしれない

しね!!」

顔を赤らめ、アリサは少しいつもより声を高くしたアリサだったが、言葉に詰まることはなかった。

「そういえば、前に話してくれたアリサの弟の話を聞かせて欲しいな」

「い、いいわよ!!」

（僕の知っている原作には存在しないアリサの弟・・・前にアテネに確認した所、ここは厳密に言えば『魔法少女リリカルなのは』の世界ではないらしい。僕がこの世界に介入した時点でここは一種のパラレルワールドのようになってるらしい。そもそも、僕の死ぬ前にいた世界も一種のパラレルワールドの一つだったらしいけど）

「お医者様が言うには、今年の暮れ位には生まれるらしいわ。もう母様のお腹の中で暴れてるくらいだから絶対元気な子よ!!」

「そうなんだ、僕もアリサの弟が生まれるの楽しみにしてるんだ」

「な、なんで、あんたが楽しみにしてるのよ」

「だって、アリサと同じできっと可愛い子だろうから」

「うっ!？」

顔を真っ赤にして、俯くアリサ。

「奏君、男の子らしいから可愛い言ったら可哀そうやで」

「あ、そうか。これからは気をつけるよ、はやて」

しかし、奏とはやての会話など聞かずにアリサは下を向いたまま、何か呟く。

「え？　アリサ、今、何か言った？」

「うるさい、うるさい、うるさい！！」

「・・・さいですか」

【INアリサ】

「そうなんだ、僕もアリサの弟が生まれるの楽しみにしてるんだ」

どうして、私に弟が生まれる事を奏が楽しみにしてるのよ？

そう、思った私は素直に奏に聞いてみることにした。

「な、なんで、あんたが楽しみにしてるのよ」

「だって、アリサと同じできつと可愛い子だろうから」

「うつ！？」

な、何て事をコイツは平然と言ってるのよ。

か、か、か、可愛いなんて・・・。

う、嬉しいけど・・・コイツの場合は特別好きだから・・・という訳ではないんだろうけど・・・どうしても、心臓の音が早くなる。

まあ、さっきまでは心臓の音なんて聞こえなかったけど・・・。

私は奏にそう言われて嬉しかったけど・・・だけど・・・それ以上には照れくさかった。

たぶん、小学校からの突き合いだからだろう。

だから、私はついつい。

「うるさい、うるさい、うるさい!!--」

そう言って、奏を黙らせる。

夜になってこの事を振りかえると・・・奏とは卒業したら滅多に会えなくなっちゃうのに・・・私、なんで奏との会話を自分から拒絶したんだろう・・・。

軽い自己嫌悪に陥ってしまった・・・。

でも、悪いのは私じゃなくて、きっと、アイツだ!!

【END】

E p i s o d e 0 4 それぞれの進路（後書き）

次回更新は3月20日を予定しています。

Episode 05 ラブレター

奏は普通の中学生のように一週間程、学校に通っていたある日のこと。

奏の下足箱の中に朝、ある一通の手紙が入れられていた。

その手紙はピンクの可愛い封筒に入れられていた。

男子と女子の下足箱は別々の所にあるため隣の下駄箱の持ち主がうつかり間違えて入れたことは絶対にない。

さらにその事実を決定づけるかのように裏に『高町奏君へ』と丁寧な字で書かれていた。

「・・・これは・・・もしかして」

例え、どれだけ鈍感な人間でも、この手紙が何を意味するか位、簡単に想像できる。

そう、奏でさえも。

「ラブレターなんて・・・初めてもらったよ」

普通の男ならば、どんな子が送ってくれたのか？

どんな内容が書かれているんだろうか？

と、夢を膨らませて期待するものだが、奏の場合は少し訳が違って

いた。

彼は卒業後、管理局で本格的に働こうと思っている。

必然的に奏はミッドチルダに移住する。

おそらく、姉のなのは、親友のフェイトとはやてと共に。

そうなれば、こちらの世界で恋人を作っても色々と問題が発生するだけだ。

それに彼には・・・

(遥^{はるか}・・・のこともあるしな・・・)

遥、奏の前世の幼馴染にして彼の初恋の相手。

彼女は今も自分が次元を超えて会いに来てくれると信じている。

「きちんと断るか・・・」

彼自身、誰のことを一番思っているのか自分自身でも分かっていない。

だから、付き合うことは断る。

でも、その子に嘘をついてまで自分には好きな人がいる、と言うつもりもなかった。

おそらく、今の状況を他人がみれば、優柔不断と思われるだろう。

しかし、彼の周りを取り巻く環境は普通の人とは決定的に違う。

それほど、『転生』とはややこしいものなのだ。

そんなことを奏が考えているとは、まったく思わず、影から奏を見つめる四人の女子達がいた。

言わずとした、なのは、フェイト、すずか、アリサである。

四人は柱の陰に隠れて奏の様子をうかがっている。

おそらく、彼女達でなければ、この後、変な人として学校中で噂されるだろう。

「・・・ねえ・・・あれってラブレターだよね」

「・・・そうだね、アリサ」

「まさか・・・奏に・・・お姉ちゃんは認めないの!」

「ちよっ、なのは声が大きい・・・奏に気づかれるでしょ?」

「いめん・・・」

「うう~~~~どうしよう・・・」

「大丈夫よ、フェイトちゃん」

「え? どうして、すずか」

「奏君が私達の知らない所で彼女を作るなんてありえないでしょ、うふふ」

月村すずか・・・彼女の顔は現在、満面の笑みであるが・・・目は一切笑っておらず・・・瞳のハイライトは完全に消えていた。

「それに最悪の場合は・・・その子を・・・うふふ」

「ちょ、すずか、何かヤンデレみたいよ、あんた!!」

「大丈夫、アリサちゃん・・・私はヤンデレじゃないから、うふふ」

「・・・やばいわ・・・なのは、フェイト協力して!! すずかを抑えるわよ!! このままじゃ、奏にラブレターを送った子が殺されかねない!!」

「「うん!!」」

その後、すずかはなのは、フェイト、アリサに引きずられながら教室に向かうのだった。

時刻は三時半を少し過ぎた頃。

奏は一人、校舎裏に向かっていた。

それはラブレターに記されていた場所だから。

校舎裏には大人しそうな女の子とその友達であろう二人の女の子が待っていた。

彼女達のリボンの色を見る限り、一年生だろう。

奏は二年生なので一つ歳下ということになる。

大人しそうな女の子が「ほら、頑張つて」と、言われながら奏の方向に送りだされる。

「あ、あの」

すでに女の子の瞳には涙が溜まり体を縮ませていることから、緊張していることがうかがえる。

「君が手紙をくれたの？」

女の子に丁寧に対応する奏。

「は、はい。高町先輩！！ 私と付き合ってください！！」

おとなしそうな、この少女からどうやって出たか分からない程、大きな声で奏に彼女は思いを告げる。

それに奏は

「ありがとう」

そう言った後にすぐに言葉を付け足す。

「僕は君とは付き合えない」

そう、きっぱりと断った。

少女の顔はみるみる歪んでいき、涙を流し始めた。

「どうしてですか？」

震える声で聞いてくる女の子。

「僕は待たせている人がいるんだ。その人のことが好きか、どうかは僕自身も分からない。でも、彼女が大切なのは確かなんだ。それにその人以外にも大切な人はいる。だから、僕は君の思いに答えられない。でも君が僕を好きだと言ってくれたことは、とても嬉しかった、ありがとう」

「高町先輩は・・・私の名前も知らないんです」

そう、この女の子は手紙に自身の名前を書かなかった。

もちろん、女の子は以前、奏と話したことはない。

「だから、私よりもその女性をとるのは当然のことです」

「・・・ありがとう。僕は君に謝らない。謝ったら君の勇気を否定することになるから」

「・・・はい。今日はありがとうございました」

震える声でそう言う女の子を残して奏は去って行った。

これ以上、ここに自分がいても彼女を傷つけるだけだから。

そう、分かっているから。

だから、去る。

背後で大声で泣く彼女を残して。

そんな時、奏の簡易デバイスに通信が入る。

『奏、例の黒い生物が発見されました』

梨桜の言葉に分かった、とだけ言って奏は空を見上げる。

空は紅く染まりつつあった。

それはまるで、これから起こる非現実的な事柄を予感させるように。

「桃子、今日のご飯はなんですか？」

「今日はハンバーグよ。梨桜ちゃん」

「そうですか」

素っ気ないモノ言いたが、梨桜の顔は満面の笑みであからさま、嬉しがっていることがうかがえる。

ちなみに、この頃、桃子と土郎、つまり、高町夫妻が揃って店に出ることは少なくなってきた。

それは後継者にあたる美由希が仕事を覚えてきたからだ。

二人揃っていると、美由希に仕事を回さなくても店が回ってしまうため、それではいけないと思い、美由希がパティシエになるための勉強で武者修行に言っていない日はどちらかが休むようにしたのだ。

そして、本日は桃子の休日。

休日と言ってもほとんど家事をしているか、テレビのワイドショーを見ているくらいだ。

「ん？」

そんな時だった、梨桜がミッドチルダとの通信用に持っている簡易デバイスにある人物からのメッセージが届いた。

その人物とは、彼らの上司であるミゼットだった。

「っ！？ これは・・・桃子、すみません、私と奏は出かけなければいけなくなりました・・・申し訳ありません」

本当にハンバーグを食べたかったのだろう。

かなり落ち込んだ様子の梨桜だった。

「分かったわ」

作った食べ物が無駄になるにも関わらず、桃子は嫌な顔一つせずに了承する。

彼女が奏と梨桜のことをきちんと理解しているから、できる行動だった。

「ありがとうございます」

そして、梨桜は高町家での自室に戻る。

そこに、彼女のスーツを置いてあるから。

ついでに自室で奏にミゼットからの連絡を伝える。

奏は『分かった』それだけ言って通信を切ってしまった。

普段の奏はそんな事はしないはずなので、何かあった、と理解する梨桜だったが奏の表情は別に悩んでいる風ではなかったので何も言わないことにした。

「しかし、こんなにも早く奴らが姿を現すとは・・・さすがに予想外ですね」

黒い化け物がいた世界は管理局によって完全に隔離されたと言っても過言ではなかった。

だから、本来はそこから脱出する術など、化け物には存在しない。

「バックに誰がいるか・・・私達と同等の知能と技術を有しているかのどちらなのでしょう・・・」

彼女の呟きに答える者は、その部屋には誰もいなかった。

「ねえ・・・皆、やっぱり止めようよ・・・奏の後をつけるなんて・・・」

なのは、フェイト、すずか、アリサは放課後になり、教室を出て行った奏を追跡中であつた。

「フェイト、何よ、今更、フェイトは気にならないの？ 奏のこと」

「・・・でも・・・やっぱり、相手の子に悪いし」

「それでも」

「分かつた」

フェイトとアリサが話している間ずっと、なのはとすずかは奏のことを凝視しているのだった。

そのことに気づいたアリサは、さすがにここまではやり過ぎだな・・・と思つたがフェイトを説得してしまつた後だったので、凝視するのはやめようよ、とは言えないのだった。

もし仮に言えたとしても

『『アリサちゃん、O H A N A S Iしようか？』』

と二人に黙らされてしまうのだが。

そんな四人に見られているとは知らず、奏に手紙を出したであろう女の子が校舎の裏で待っていた。

「あの子・・・可愛いよ・・・」

フェイトが力なく、そう言う。

奏のことを待っていた女の子は、大人しそうだが確かに将来、美人になるであろう可愛い女の子だった。

それから少し様子を窺っていたら、突然、『高町先輩!! 私と付き合ってください!!』という女の子の大きな声が四人の所まで聞こえて来た。

この付き合ってくださいとは、買い物に付き合ってください!! ！では明らかにない。

四人に緊張が走る。

しかし、その緊張はすぐに解ける。

なぜなら、女の子が泣きだしたから。

そんな女の子を見て安堵する半面、もしかしたら自分も、あの女の子と同じように奏にふられるのではないか・・・という恐怖も同時に思っていた。

だから、あの子が他人とは思えなかった。

しかし、ここで彼女達が出て行って女の子を慰めるのは、あの女の子に失礼だ。

だから、ここから立ち去ろうとした時。

「なんや、奏君も意外ときつちりしてるな」

この場にはいないはずの関西弁の親友が四人の後ろに立っていた。

「はやて!？」

「うん、フェイトちゃん」

「どうして、ここに・・・」

「怪しさ満天の親友四人がどっかに死にそんな顔をしながら歩いて行っただけになんて見に来たんや」

「そう・・・」

「けど、これはあんまり、褒められた好意やないよな」

「うん・・・」

「今日はきつちりと私がO H A N A S I Iしよか」

その後、放心状態だったのは、すずか、アリサを起こして、はやてのO H A N A S I Iが始まるのだった。

E p i s o d e 0 5 ラブレター（後書き）

次回更新は3月27日を予定しています。

Episode 6 プライドという名の罪

「奏、今回の私達の仕事を説明します」

「うん」

奏と梨桜は現在、次元航行艦を使ってあの黒い化け物が出た世界へと向かっている。

「今回の任務は黒い生物の殲滅、あるいは捕獲ですが、前回と同じ奴らなら捕獲は困難でしょう。手配していた捕獲用の部隊はまだ、運営には至っておりません」

「うん、分かった。それなら殲滅しよう。もし、これから行く世界の人が同じように消されたら・・・いけないからね」

「ええ。ミゼットも人命を優先させるように言っています」

ちなみに、なぜ、奏達が次元航行船で向かっているかと言うと住民を次元航行艦に避難させるためだ。

現在、襲われている世界は開拓中の世界であるため開拓をするために管理世界から派遣あるいは自分の意思で向かった数百人程度である。

それなら大規模転送を行うよりも次元航行艦に移動させた方がコストの面でも安全性の面でも上回っている。

『失礼します。高町二佐、まもなく、着きます。転移室へて向かっ

てください』

奏と梨桜の部屋に備え付けられたモニターに一人の通信士が映り、そう言う。

「分かりました。向かいます」

そう言うて奏は梨桜と共に転移室に移動する。

すると、そこには。

「え？」

中隊クラスの人数の人間が先についていた。

それに驚いている奏と梨桜に一人の佐官らしき男が近づいてくる。

「高町二佐。初めまして今回の事件の現場指揮を任されました。イーリー三佐です」

「こちらこそ、初めまして高町奏です」

「高町二佐の御活躍の程は私も聞き及んでおります。ですが、今回の事件は私が直接指揮を取らせていただきますので、高町二佐のお力を借りることはないと思われます。ですから、ここで待っていてくださって構いませんよ」

イーリーと名乗った男は顔こそ笑っていたが確かに奏に対しての敵意を感じられた。

奏、おそらく彼は・・・

分かってるよ

イーリーという三佐は未だに子供である奏が二佐という自分より上の地位についているのを快く思っていない。

だから、奏に活躍の機会を与えたくないのだ。

別にこれが初めてのことでないので、このような事態にどのように対応すればいいか奏は心得ていた。

「では、僕は出撃しませんが、イーリー二佐の隣で勉強させていだいてもよろしいでしょうか？」

「は？ あ、いえ、それなら・・・構いません」

自分を相手より劣っていると思わせることで同行を許可してもらう。

それが、いつも、自分を快く思っていないくて、現地に自分を行かせようとしない佐官にとる手段だった。

もちろん、他にも何パターンか、このような事態の対処法を奏は考えているのだが。

そして、佐官との話が終わったので、奏は壁際に梨桜と移動して念話で話をし始める。

それにしても、梨桜、今回は特務じゃないよね？

ええ、そうですが・・・三提督が関わっている事件でこのような輩が出て来るとは・・・おそらく三提督の知らない所で誰かが勝手に手配したのでしょうか・・・

今回の案件・・・黒の上訴部が絡んでいる可能性があるね

はい。解決した後に探ってみましょう

ちょうど、会話が終わった所で転移室にアナウンスが流れる。

『次元転送まで後、三十秒です。各員、準備を』

準備と言っても、突然、場所が変わると乗り物酔いのように気分が悪くなる者がいるので、目をつぶる時間を与えろというだけなのだが。

そして、転移が始まるのだった。

「各員、個々の判断で化け物を駆逐しろ!!」

「『『『『はっ！』』』』」

転移した場所から少し移動した、この世界の住宅地で一度、皆、落ち合っていた。

さいわいなことに町の住人達はほとんどが無事だった。

そして、そんな状況に一息ついていた僕だったけど、すぐにまた、ハラハラさせられる事態に陥った。

イーリー三佐の指示はともじやないが作戦と呼べるモノではなかった。

町人からこのあたりの地図を受け取ってそれを無造作に広げて、『このあたりの敵はおまえが駆除しろ』と指示しただけ、それで終わり。

部隊員から苦情が出るのを期待したんだけど・・・皆よほど、自分の実力に自身があるのか反発する者がいないどころか・・・自身満々に『任せてください』と言っただけだった。

「イーリー三佐、僕は避難誘導の手伝いをして来て、よろしいでしょうか？」

「ああ、構わないよ」

何に満足したのか・・・イーリー三佐から簡単にお許しがもらえた・・・何もなければいいけど。

まあ、自分の傍にいられたら邪魔だから・・・だろうけど。

取りあえず、梨桜と二人で避難誘導に向かう。

そして、避難誘導を始めて三十分位たった頃だろうか？

「きゃああああー!!」

イーリー三佐のいる方から悲鳴が上がった。

おそらく、女の隊員の悲鳴だろう。

「奏!!」

「分かってる。梨桜はこのまま避難誘導を続けて、護衛も兼ねて」

「ええ、分かりました。奏も気をつけて」

「うん」

僕は駆け出す。

すると、黒い影でできた熊に襲われそうになった管理局の武装局員の服をした女の人がいた。

おそらく、転移室では僕が気づけなかった人だろう。

「
聖剣解放せいけんかいほう

竜を貫け!! アスカロン!!」

神速で一氣に女性局員と熊の間に入り振り上げたアスカロンから全力の一撃を熊に放つ。

その突然の出来事に対応できなかった熊の化け物はその身に奏のアスカロンを受ける。

そして、斬られた部分から塵のように影が霧散するが、熊の化け物は消滅には至らない。

しかし、熊の化け物には、大きな隙ができた。

そこを奏が見逃すはずもなく。

横に一撃を加える。

上半身と下半身を真つ二つにした。

今度は体全体が塵のようになり、悲鳴も上げずに霧散する熊の化け物。

「今、どんな状況なんだい？」

「は、はい・・・武装員の約七割は・・・あの化け物達に取り込まれました」

「消されたんじゃない？」

「はい、取り込まれました・・・その後、その化け物を倒しても今みたいに霧散するだけで・・・それで、倒しても倒しても増え続ける一方で皆の魔力が底について」

「分かった。イーリー三佐はなんと？」

「・・・戦線を維持しろ」

「分かった。君は負傷者を連れて転移ポイントに移動して、戦う必要はない。奴らと出会っても逃げるんだ。いいね」

「はい!!」

女性局員から離れた後、奏はすぐに通信用の転移デバイスを起動させ、この周辺一帯に通信をいれる。

「武装局員に告ぐ、敵を撃退する必要はない。戦いながら後退し転移ポイントに移動しろ。これは『二佐』の命令だ。自分と民間人が生き残ることを第一に考えろ、以上だ」

そう全員に送った後にすぐにイーリー三佐から簡易デバイスに通信が入る。

『天童二佐!! 勝手なことをされては困ります!!』

「うるさい、すでに君は七割の武装局員を失ったのだろう？ もはや、あなたに任せていたら全滅します。それにこれは『二佐』としての判断です。あなたに覆す権限はありません。覆されたい場合は私以上の位を持つ佐官の命が必要です」

『くっ!? しかし・・・』

「私は今から生き残った武装局員の保護に向かいます」

『・・・ガキが・・・調子に乗りやがって!!』

そこで通信を切る。

これ以上は無駄だ。

それなら一人でも多くの人を救った方がいい。

僕は神速を使って再び駆け出す。

「くっそ、くっそ、くっそ、これでは手柄が全部あいつにとられてしまっではないか!!」

部屋に備え付けられたテーブルを叩くイーリィ。

戦線は奏の言う通り好ましいものではなかった。

七割の武装局員を失ったにも関わらず、敵は一切、勢力を衰えさせることはなかった。

正直に言って、責任問題で左遷させられるのは確定だ。

それなら、残った戦力でなんとかして功績を上げなくてはと思い始めて作戦を考え始めた時に奏からの通信が入った。

二佐の権限を使われてしまった以上、覆すには一佐、あるいはそれ以上の位の人間の決定が必要だ。

しかし、今の状況でどこに連絡をとっても自分に味方してくれる者はいないだろう。

ここで奏の発言を撤回させて部隊員が全滅すればその者も左遷させられる恐れがあるから。

「どうする……どうする……」

そんな時だった。

不意に扉が開く。

「何者だ！！ ノックもせずに入ってきて来るやからは！！」

そこに立っていたのは身長130センチほどの子供だった。

しかし、恰好が以上だ。

黒いローブをはおり、フードで顔を隠している。

「おじちゃん、何を怒っているの？」

声から察するに女の子のようだ。

「今、私は忙しいガキは出て行け!!」

そう怒鳴って、再び作戦を考え始める。

作戦と言っても、どうやって自分が左遷されなくするか、である。

「おじちゃんの闇、美味しそうだ。いただきます」

「え？」

イーリーが再び女の子の方を向いた時には自分の体を黒い何かが包みこんでいた。

現在、奏と武装局員は転移ポイントまで何とか移動することに成功した。

数人、化け物に取り込まれてしまったが。生き残っていた者のほと

んどが助かった。

「イーリー三佐が応答されません・・・おそらく、化け物に取り込まれたのかと・・・」

「分かった。皆は一端、転移してくれ。僕は一度、まだ行き残っている人がいないか、どうか確認してから戻るから」

「しかし一人では・・・」

「大丈夫、それに梨桜もいるし」

「分かりました。御武運を」

「うん」

武装局員が転移したのを確認して、奏は梨桜に話しかける。

「これから何があるか分からないからユニゾンを」

「分かりました」

「「ユニゾンインー!!」」

梨桜とのユニゾンが完了した奏の髪は金色に変わり、瞳の色も翠色に変わる。

「さて、と。梨桜、探索魔法を」

『はい』

梨桜に探索魔法を使ってもらっている間に自分は周りを警戒する。

すると、案の定、動物の形をした色々な化け物が襲ってくる。

それに奏はアスカロンで応戦する。

彼らは確かに数が多く魔導師Aランクの力を持っている。

しかし、魔導師ランクSSである、奏の敵ではなかった。

遠慮をしていない奏のアスカロンが十五体程、倒した時に梨桜の探索魔法が終了した。

『奏、探索魔法が完了しました』

「結果は？」

アスカロンを構えたまま、聞く、奏。

『この周辺に人間の反応はありません』

「分かった。それなら、僕達も転移を・・・」

奏が転移魔法を発動しようとした時だった。

「ねえ、お兄ちゃん達」

子供の声が聞こえた。

そして、奏の前に黒いローブを着た子供が姿を現した。

顔はフードをかぶっているので見えないが、奏はこの子供が普通ではないと気づいていた。

「君は・・・」

「お兄ちゃん、お姉ちゃんは元気にしてる？」

「え？」

「お姉ちゃんは幸せ？」

「何を・・・」

「私も今は幸せなんだ」

少女は愉快そうに一度、その場で周る。

「皆がいるから、皆、お願い」

そう言うと、人間型の黒い化け物がデバイスらしきものを持って現れた。

「ふふ、じゃあ、またね」

そう言い残して消えようとする子供に奏は

「待て!!」

というが、

「嫌だよ」

そう言い残して転移していった。

『奏、来ます!!』

子供に今まで、注目していて気づかなかった奏だが、人型の化け物達がすぐ、そこまで迫っていた。

奏は慌てて、アスカロン振るうがアスカロンは化け物が持った影のようなデバイスによって防がれる。

いくら気が動転していたとしても奏はSSランク。

その奏が放つアスカロンの斬撃を受け止める、ということは、六体いるその化け物はおそらく一体一体がAAランクの力を有していることを示していた。

幸いなことに統率こそとれていないものの、それは十分、脅威たりえる強さを持っていた。

もし、彼らが先ほどの戦闘で動物型の化け物と同時に出て来ていれば・・・無事な武装局員がいたかも怪しくなってしまう。

「ここで倒しておかないと、後々、たいへんなことになるかな・・・」

「

』はい、おそらくは・・・』

「ここで倒すよ、梨桜、サポートを」

『了解しました、アスカロン、魔力解放』

アスカロンから紅い魔力が吹き出す。

梨桜が奏とユニゾンした時の仕事は奏が扱う聖剣の制御を主としていた。

それにより、奏は魔力操作に気を取られることなく、戦闘を行える。

そして、目の前の奏の剣を受け止めている化け物から距離を一度とり、神速により立て続けに剣撃を放つ奏。

それにより、動物型と同じように塵になって霧散する人間型の化け物。

しかし、倒せた事に息をつく暇もなく、他の化け物が杖型のデバイスのようなもので奏を殴って来る。

それをアスカロンで受けるも、それは拮抗した。

そう、拮抗した。

（杖型なのに・・・強度はベルカ式のアームドデバイスと同じくらいの強度があるのか・・・）

反撃に出ようとする奏だったが。

それをやめてすぐに後ろに跳ばなくては行けなくなった。

なぜなら・・・

「魔法まで使うのか・・・」

デバイスのようなそれは本当にデバイスなようで、奏が先ほどまでいた場所はスフィアによる攻撃が加えられていた。

「これは・・・かなり厄介だな・・・」

今は前衛に三人、後衛に二人いる。

先ほど、統率がとれていないようにも見えただが、それは先ほどの一体目のみが勝手に出て来ただけであって他の五体は統率がとれているようだ。

「どうして・・・って考えるのは後回しだな」

『ええ、その方がいいかと・・・油断していると危ないですよ』

「ああ、それじゃあ、天童奏、押して参る！！」

そして、今、奏と五体の化け物との戦闘が始まりを告げるのであった。

Episode 6 プライドと己の罪（後書き）

次回更新は、4月12日を予定しています。

Episode 7 望まれた再会

「フェイト、すまないがミッド郊外で異常な反応があるんだ、見て来てくれないか？」

「え？ 分かったよ、クロノ」

現在、フェイト・T・ハラオウンは地球の海鳴町を離れて時空管理局本局に来ていた。

もちろん、執務官見習いの仕事である。

彼に仕事を依頼したのは彼女の義兄で仕事の上司でもあるクロノ・ハラオウンだった。

「でも、良いの？ 私が言ってもミッドには地上部隊があるのに」

「そうなんだが、その地区を担当の部隊で集団の食中毒があつてね。その対応に追われているから本局に依頼が来たんだ」

「分かった。行ってくるよ」

そう言つてフェイトは執務官室を出て行く。

クロノがこれを依頼したことで物語は動き出すのだった。

「はあ、はあ、はあ」

奏の目の前には黒い人型の化け物が一体だけ残っていた。

『奏・・・大丈夫ですか？』

「なんとか・・・」

戦闘は二十分ほど続いていたが、終始、奏が押していた。

現に四体は倒せた。

しかし、五体の動きのコンビネーションは恐ろしい程、整っていたため、苦戦を強いられていた。

なんとか、四体を倒したのはいいがかなりの体力を奪われてしまったのだ。

「これで最後だ」

神速によって、瞬時に最後の一体の後ろをとり、アスカロンで切り裂く。

それを受けて黒い塵となって消える人間型の黒い化け物。

「ユニゾンアウト」

梨桜とのユニゾンを解いた奏は息を整える。

「奏・・・先ほどの戦いのことなのですが・・・あれは」

「うん、普通の人間にはできない統率された動きだった。動物型の化け物は統率がとれた動きができなかった。それに六体いた内、一体はそれができなかった・・・ということは」

「ええ、私も考えたくありませんでしたが」

「あれは化け物に取り込まれた局員だ」

「しかし・・・このような事態・・・起こりうるのでしょうか？
確かにそうでないと説明が付きませんが・・・」

「分からない・・・でも、彼らから気持は感じられなかったし実態はなかった・・・ということは恐らくあれの中はどこかに繋がっているんだと思う。そして、取り込んだ者の力とコピーした肉体が使えるんだと思う」

「・・・高ランクの魔導師が取り込まれた時はゾッとしますね」

「うん・・・とりあえず本局に戻ろう一度、ミゼットさんと話し合う必要がある」

「はい」

そう言って転移して次元航行艦に戻る奏だった。

「アリシア、今日はお休みをもらったからどこか遊びに行きましょう」

「うん、ママ」

返事をした少女は12歳くらいの金髪をツインテールにした少女、アリシア・テッサロッサだった。

そして、どこか行こうと誘った大人の女性はプレシア・テッサロッサ。

アリシア・テッサロッサの実の母にしてフェイト・T・ハラオウンの生みの親である。

「でも・・・私はママとフェイトと一緒にどこかに行きたいな・・・」

アリシアの顔は曇る。

自分の妹にして未だに再開を果たせない少女のことを思い出していたから。

「ええ・・・私も許されるのならば・・・あの子に会いたい・・・でも・・・私はまだ、あの子に会う勇気がもてないの・・・ごめんなさいね」

「私に謝らないで謝る相手は私じゃなくてフェイトだよ」

「そうね・・・それで今日はどうしましょう。ピクニックにでも行きましょうか？」

「うーん、やっぱり、久しぶりに家でゆっくりしたいような気がするし、ピクニックにも行きたいような気もするしな〜」

腕を組んで迷うアリシア。

悩んでいる時だった。

プレシアの専用デバイス『メデューサ』が声を発する。

『メデューサ』の待機状態での姿は紫色のブレスレットだ。

「マスター!!」

「どうしたの、メデューサ」

「ここから五キロ程、北西に行った所でフェイト・テッサロッサの

魔力反応が・・・しかし・・・フェイト様の魔力からフェイト様が使っている魔法は攻撃魔法なのですが・・・近くに生物反応はまったくありません」

「機械と戦っているのじゃないの？」

「ええ、機械が発する電磁波の反応もありません」

「おかしいわね・・・少し調べましょう・・・アリシア・・・ごめんなさい・・・今日は・・・その」

「大丈夫だよ、ママ、私もフェイトのことは心配だし、それに私はお姉ちゃんだから!!」

その小さな胸をはって偉そうに言うアリシアだった。

「くっそ!!」

クロノは執務官室の壁を叩く。

彼は今、自分がフェイトをなぜ、ミッドの郊外に一人で行かせたのか？ と後悔しないではいられなかった。

ただの調査任務だから。

と、いうのが最大の理由だったが、正義感の強い彼がそれで納得できるはずがなかった。

「クロノ君、落ち着いて！！」

そう言ったのは彼の補佐官にして、彼に先日、プロポーズされたエイミィだった。

「これが落ち着いていられるか！！」

その剣幕には危機迫るものがある。

なぜ、こうなったかと言うと五分前のこと、フェイトから通信が入った。

その内容はミッドの郊外についたことと特に不審なことはないとの報告だった。

それを聞いたクロノは取りあえずもう少しだけ調査をしてくれ、と言おうとした時だった。

画面の端に黒い何かが映ったのでフェイトにそれは何なのか？ と聞いた時にその黒い物体がフェイトに襲いかかった。

クロノの声によってなんとか反応できたフェイトだったが、多少、

怪我を負ってしまったたらしく周りに血が少し飛び散った。

そんな時にちょうど、エイミィが執務官室に入って来たのだ。

「ど、どうしたの！？ クロノ君！！」

そして画面を覗き込んだエイミィは

「あ、これは・・・」

そう言った時に、画面は真っ黒になり通信は切れてしまった。

「エイミィ！！ 今のが何か知っているのか！？」

「う、うん・・・奏君が遭遇して調査していた・・・化け物だよ。かなり強いみたい・・・」

「なんだと！？」

それを聞いたクロノの行動は早かった。

地上部隊に救援を要請したのだ。

しかし、地上部隊の返答は『残念ながら救援に迎える程の人員は現在いない』だった。

確かに地上部隊だけでは手が回らないので救援を依頼したのに、その救援で来た者を救援しに行く人員が存在するはずがない。

そして、クロノが壁を殴ったのだった。

「はあ、はあ、はあ・・・」

フェイトの右腕はダランとしている。

クロノとの通信中に受けた攻撃で右腕が折れたのだ。

それで左腕に持った斧型のデバイス『バルディッシュ』を使い、犬型の黒い化け物を撃退しているのだが、いかせん、犬型の化け物の数が多い。

「Master!!」

バルディッシュの電子音に似た声が響く。

それはフェイトの劣勢を示していた。

「・・・うん、分かっているよ、バルディッシュでも・・・今は救援を信じて持ちこたえるしかないよ」

そう言った所で右から五匹襲って来た。

「はああああ!!」

それをなんとか、左手だけで振るったバルディッシュで撃退するも、また三匹、今度は左から襲って来た。

それにも必死に対応するが、二匹倒した所で右手が痛む。

「っ!？」

その瞬間を見逃さずに犬型の化け物は爪でフェイトのバリアジャケツトを切り裂く。

「きゃあ!？」

そしてそのまま、体当たりされて・・・フェイトは廃ビルの壁に激突する。

「うつ・・・」

打ちどころが悪かったのか・・・フェイトの視界が歪む。

そして立とうとしてもフラフラして立ち上がれない。

フェイトは軽い脳震盪を起こしていたのだ。

「くっそ・・・」

下唇を噛みしめるフェイト。

このままでは自分は100パーセント負けてしまう。

救援は恐らく間に合わない。

フェイトに体当たりした犬型の化け物がフェイトに襲いかかる。

（助けて！！ 奏、母さん！！）

目を瞑ってしまうフェイト。

そんな時だった。

フェイトに襲いかかろうとしていた犬型の化け物に向かって紫色の雷が放たれる。

それを一身に受け黒い犬型の化け物は塵になって消える。

「私の可愛い『娘』に手を出そうなんて良い度胸じゃない？ 全員、葬ってあげるから覚悟しなさい」

その声はフェイトが待ち望んだ人のものだった。

Episode 07 望まれた再会（後書き）

次回の更新は少し未定です。

詳しくは、活動報告の方に書かせていただきます。

長期の更新停止にはならないと思いますが………

Episode 8 襲う影

「奏!! ミゼットからの連絡です!!」

「どうしたの?」

次元航行艦の中の奏に割り当てられた部屋でくつろいでいると、梨桜が慌てた様子で入って来た。

「ミッド郊外に奴らが現れたそうです・・・」

「状況は?」

「フェイトが・・・一人で戦っているそうです」

「な!?!」

「それも奇襲により傷を負っている可能性が高いと・・・」

「あれを使ってフェイトの元まで転移する。ユニゾンを」

「はい」

二人がユニゾンしようとした時だった。

奏が持つ簡易デバイスに通信が入る。

「この音は・・・アリシア?」

普段、奏が任務の時は一切、通信をしてこないアリシアが通信してくることに驚いた奏はユニゾンするより先に通信の回線を開いた。

『奏、ごめん、時間がないから用件だけ伝えるけど、これに見覚えは？』

アリシアがそう言うと共に、奏の簡易デバイスに一枚の画像が送られてくる。

「アリシア！！　これをどこで？」

それは先ほどまで奏達が戦闘していた黒い化け物の犬型だった。

『ミッドの郊外で。フェイトがやられそうだったけど、今、ママが向かったから大丈夫。でも、私も早く救援に行きたいから、できるだけ簡単にあいつらについて分かっていることを教えて』

それを聞いた奏はプレシアが向かったのならフェイトは当面は大丈夫だろう、と判断して、自分の持っている情報をアリシアに伝える。

それは、動物型と人間型がいて動物型に知能はないが人間型には知能があるものもいるから気をつけろ、そして、そいつらを呼び出せる子供がいる、という簡単な説明をした。

『分かった。ママにはそう伝えるよ。私も今からママの手助けに行くけど、できれば座標を送るから後で応援に来て』

「うん、すぐにも転移するよ」

『むっ、まさか奏、『あの』力を使おうとしてるんじゃないよね？』

画面の向こうでアリシアが頬を膨らませる。

「そ、それは・・・」

『無理しちゃダメだよ！！ 奏が倒れたら皆、心配するんだから！
！ だから普通の転移魔法でこっちに来てね！！ 絶対だよ！！』

「うん・・・」

『それなら、よろしい。じゃあ、私はママの援護に向かうから』

「気をつけて、アリシア」

『うん』

そこで通信は切れる。

「奏、アリシアとプレシアが向かったのなら大丈夫でしょう。ここは無理をせずに行きましょう」

「でも・・・」

「大丈夫です。アリシアの剣の腕は私、直伝ですよ？ 奏が相手でも聖剣なしで戦ったら苦戦しますよ？」

「そうだね・・・艦長に少し急いでもらうように連絡しよう」

「私の可愛い『娘』に手を出そうなんて良い度胸じゃない？ 全員、葬ってあげるから覚悟しなさい」

そう言ったのは、フェイトを鞭で叩いていた時に着ていたドレスを元にして作ったバリアジャケットに身を包んだプレシア・テッサロツサだった。

しかし、当時とは違い、髪をポニーテイルにしている。

そして、杖型のデバイスである『メデューサ』を再び振るう。

すると、犬の化け物に紫色の雷が降り注ぐ。

化け物が魔法障壁を張れるはずもなく、プレシアの雷をもろに受けてしまい簡単に塵になって消える。

敵が塵になったことを確認すると、フェイトの方を向くプレシア。

「フェイト、ごめんなさいね」

「あ、あう、う・・・」

「私は未だにあなたに会う資格すらないわ。でも、あなたのピンチが見ていらなかったの。あなたを助けたかったそれは私の本心だから……」

それを聞いて何も言えないフェイト。

彼女の中で未だにプレシアの存在は大きなモノだ。

しかし、彼女は死んだのだ。

そう自分に言い聞かせて生きて来た。

それなのに、今、自分の目の前に自分に優しい言葉をかけてくれる。

自分の理想の母親がそこにいる。

二人で見つめ合って、どれくらい経ったか分からないが、ふとフェイトは気づいた。

プレシアの背後にまた、あれがいます。

「あ、危ない!!」

そう声が出た時には既に化け物はプレシアの真後ろまで来ていた。

「はい。親子の再開なんだから、邪魔しないの　ライトニングスマッシュャー!!」

突如、プレシアの真上から純白のバリアジャケットに身を包んだアリシアが、白い大きなハンマーを持って現れた。

そして、その人を潰せるのではないか？　と思うほど大きなハンマーで化け物を地面に叩き潰す。

化け物は問題なく塵となったが、ハンマーが直撃したアスファルトの地面にヒビが入って半径5メートル程のクレーターができる。

「皆のアイドル、アリシア、参上」

それを行った本人はピースをしながら上機嫌だった。

プレシアはと言うと、フェイトをお姫様抱っこしながらアリシアの作ったクレーターからフェイトを守っていた。

「もう、アリシア、ミヨルニル、少しは手加減なさい」

「はは、ごめんなさい」

「すみません」

そんな二人のやりとりを余所にクレーターができた時の爆発音を聞きつけたのか、動物型の他の化け物が三人の元に向かってくるのが見えた。

「ママ、フェイトを抱えたまま、サポートよろしくね」

「分かったわ。気をつけなさいよ」

「はい。ミヨルニル、フォーム、ダブルソード」

「了解しました」

すると、ハンマーの先端がとれて柄の部分だけとなり、それが二つに割れる。

そして、その柄から刃が現れて純白の二本の刀へと姿を変える。

「行くよ!!」

そう言った後のアリシアは早かった。

一瞬で熊型の化け物まで近づき、切り裂く。

「次!!」

今度は蛇型。

その次はまた、犬型。

奏の神速に速度は劣るものの、それは既に普通の魔導師には反応できない程の速さをアリシアは得ていた。

そんな時だった。

「しまった!？」

空から鷹型の化け物が襲って来た。

アリシアはワントempo反応が遅れてしまって防御の姿勢に入る。

しかし、鷹の爪はアリシアに届くことはなかった。

なぜなら

「もう、アリシア、気をつけなさい」

プレシアが雷でその鷹を薙ぎ払ったから。

「うん!!」

それから、一方的だった。

アリシアが小型を薙ぎ払って大型をプレシアの特大の雷で薙ぎ払う。

十分もしない間にあたりには一匹の化け物もいなくなった。

「ふう、終わったね〜」

アリシアがプレシアの元にやって来る。

終わった、プレシアもそう思い、今まで、お姫様抱っこしていたフ
ェイトを下ろす。

そして、

「大丈夫？ 立てる？」

フェイトに優しく笑いかける。

「あ、は、はい」

それにフェイトはモジモジしながら答えることしかできなかった。

「初めまして、フェイト！！ 私はフェイトのお姉さんのアリシアだよ！！」

「え？」

自分と同じ顔の少女、しかし、自分よりも幼い。

何が何だか分からなくて再び混乱しそうになったフェイトだったが、事態はそれどころではなくなった。

「なかなか、強いね。おばさんとお姉ちゃん」

「「っ!?!」」

その声がした途端にフェイトを後ろに隠すようにして前に出るプレシア。

そして再び構えるアリシア。

そこに立っていたのは黒いローブを着た子供だった。

フードをかぶっているために顔は見えない。

「ママ、コイツ、奏が言ってた、奴だ・・・なんでも、さっきの奴ら呼び出せるらしい」

「そうなの、アリシア、それなら、ここで私達があの子を捕まえら

ればこの事件は解決ね」

「うん」

「でも、その前に私の娘を気づつけたお礼はしっかりとしないかね」

「うん、私もフェイトのお姉ちゃんだから頑張るよ」

すると、少女が笑いだした。

「私が？ お姉ちゃん達に捕まる？ ありえないよ、何かのジョーク？ アハハハ」

それに少しカチンとくるプレシア。

しかし、決して冷静さを失わないように一度、深呼吸をする。

「あの、『高町』ならともかく『テッサロッサ』じゃ、無理だよ」

「どういう意味なの！？ あなたはいつたい！！」

吠えるように叫ぶアリシア。

「教えてあげない。だって、ゲームはまだ始まったばかりだから」

「アリシア、問答無用よ。あれを呼び出される前にかたをつけるわ」

「うん、ママ！ー！」

プレシアが紫の雷を放った瞬間にアリシアも子供を捕まえるために

走り出す。

「うん、無駄」

子供がそう言うと、プレシアの雷は子供の手前で止まってしまっ

「魔法障壁？ 私の雷を完全に止めるほどの強度の・・・」

「いくら、強力な魔法障壁でも、実体剣なら！！」

アリシアの二本の刃が子供を捕える。

「それも、無駄」

突如、子供の足元から三匹の犬型の化け物が現れてアリシアの行く手を塞ぐ。

「アリシア！！ 戻りなさい！！」

プレシアが叫ぶ。

それを聞いたアリシアはとっさに後ろに飛んでプレシアの所まで戻る。

すると、次の瞬間に今までアリシアがいた所に熊の爪が空を切る。

「よけられちゃった」

特に気にした様子もなく、子供は言う。

それを見たプレシアは小声で

「一端、退くわよ、アリシア。相手の能力が分からない以上、戦うのは危険だわ」

そう言った。

「うん、分かった」

アリシアも同様に小声でプレシアに返事をするが。

「逃がさないわよ」

子供がプレシア達を囲むようにして十五体の人型の化け物呼び出した。

呼び出した後、少女はどこかに消えてしまった。

「っ！？ ママ、これは逃げるのは厳しいよ・・・奏が応援に来てくれるまで・・・逃げながらなんとかしよう」

「ええ、そうね。アリシア、悪いんだけど」

「うん、フェイトが怪我しているんだもん、ママはフェイトの傍にいてあげて私が前に出て時間を稼ぐから」

「ありがとう」

そんな二人のやりとりをしている二人を見ながら、フェイトは必死に自身を落ち着かせていた。

そして、状況を整理すると。

（私が母さんとアリシアに迷惑をかけてる・・・）

やっこの思いで一言、発する。

「ごめんなさい・・・」

それに二人は首を傾げる。

そして、アリシアは何を言われたかプレシアより先に分かったのか。

笑いながら

「ここは、『ごめんなさい』じゃなくて『ありがとう』だよ。私達は『家族』なんだから。それに怪我している妹は後ろで休んでいなさい。私はお姉ちゃんなんだから、ねえ、ママ」

「ええ、そうね。お願いするわ。お姉ちゃん、頑張って妹に良い所を見せてね」

「うん！！ ミヨルニル！！ ハンマーモード！！ できるだけ初めに数を減らすよ！！」

「了解しました。アリシア」

ミヨルニルは再びハンマー形態になる。

「メデューサ、私達も数を減らさせましょう」

「ええ、分かりました」

すると、プレシアの周りに紫色の雷の塊を作りだす。

「行くよ！！ ライトニングスマッシャー！！」

雷を纏った巨大化したハンマーを人型の化け物に向かって放つ。

「エレクトリックデストラクション！！」

プレシアが特大の雷の塊をアリシアのハンマーを避けた化け物三体が密集している所に放つ。

それによって、土煙が巻き起こる。

「はあ、はあ、はあ・・・これで結構、倒せたんじゃない？ ママ」

多少、魔力を消費したために息が上がるアリシア。

「メデューサ、どう思う？」

「はい、プレシア・・・敵の情報が少なすぎるので分かりませんが
半数は倒せていないかと・・・」

土煙が晴れると・・・そこには

「今ので三体しか倒せなかったなんて・・・さすがに自身を無くす
わね、アリシア」

「そうだね、ママ、帰ったらもつと修行しないと、ね」

「ええ、そうね」

『奏！！　　どういう意味だ！！　　フェイトが大丈夫とは！！』

モニター越しにクロノが叫んで来る。

クロノに対して、アリシアとプレシアさんのことはまだ秘密なので誰が救援に向かったのか言う訳にはいかないけど・・・ここまで言われると・・・。

『クロノ君、落ち着いて！！』

画面越しでエイミィがクロノを落ち着かせようとするが一向に落ち着かないクロノ。

「奏、奏がはつきりと言ってやらないから、クロノがつけ上がるんです」

「り、梨桜」

少し慌てる奏。

しかし、梨桜はクロノに一切、遠慮せずに言葉を続ける。

「あなたがそもそも、フェイトを一人で行かせなければこんなことにはならなかったのでは？ それに、そもそも、もし、奏がいなかったら、どうする、つもりだったのですか？ フェイトを見殺しにしていたのですか？ あなたに奏に情報を公開させられる力はありませんよ。提督試験に受かったばかりで何もできないクロノ執務官」

『っ！？』

画面越しに梨桜を睨むクロノ。

「梨桜、言いすぎだ」

「いえ、奏、このような現実を分からない子供にはきちんとやってやらないといけないのです。自身の無能を人に押し付けなくてください。何か私は間違ったことを言いましたか？ クロノ執務官」

『何も問題はない・・・』

そう口では言うのだが、クロノはあきらかに梨桜に敵意をみせる。

「事実を言われた位でそれほどまでに怒りをみせる。そこを直さないとすぐに提督から下に落ちてしまいますよ、クロノ執務官」

『言われなくても』

『クロノ君、梨桜ちゃんと言っているのはそういう所だよ』

『っ！?』

味方であると思っていたエイミーが梨桜の言葉に賛成したため、怒りよりも驚きで目をパチクリさせてしまうクロノ。

そんなクロノの様子を見て苦笑するしかない奏。

『梨桜ちゃん、私が後できつく言っておいてあげるから今日はこのあたりでお説教をやめてもらってもいいかな?』

「ええ、エイミーはクロノよりも大人ですから。結婚したら大変だと思いますが頑張ってくださいね」

『貴様!!』

『はい、はい、そこがダメだって言われているのよ。提督会議はもつと皮肉とか言われるんだよ。それで一々、怒ってたら、頭、はげるよ』

『僕にはげない!!』

「せいぜい、はげないように頑張ってくださいね。クロノ執務官」

『きこ』

そこで梨桜は通信を切る。

「梨桜・・・言いすぎだよ」

「奏、あの馬鹿にはこれくらい言ってやってちょうどいいのです。自分は何もできないのに、プレシアとアリシアの情報を教えるなど」

「クロノも一応、義妹^{いもづと}を心配してのことなんだから」

「本当に心配しているのかも分かりませんよ、あの男は・・・それにプレシアの件も元々・・・リンディ・ハラウンが・・・」

「梨桜。それは言わなくていいことだ。僕達が下手に干渉しても良い方向にいかない。あれは本人達の問題だから。それにリンディさんも馬鹿じゃない。時が来たら話すさ」

「・・・そうですね」

「さて、そろそろ、ミッドチルダだ。一応、プレシアさんとアリシアが救援に向かった以上、問題ないと思うけど急ごう」

「はい」

Episode 08 襲う影（後書き）

文章、強化プログラムが終了したので、前よりも少し更新頻度が上がると思います。

……あんまり変わっていませんか？（泣

自分でも、そう思います（汗

今後、少しずつ、成果をお見せできると思います！

ちなみに、第一回、文章強化プログラムの最終課題として、オリジナルを一本、書き下ろしました。

なるう、に投稿するオリジナルは初めてです（汗

そちらで、タイトルは『ガンナーズドライブ』ですので、見ていただけたら……と（ノヽ） ハジカシー

宣伝みたいになってしまつて申し訳ありません。

一応、明日も一話、更新する予定です Ⅱ*ハハ*Ⅱにこつ

Episode 9

「やってくれるわね」

その怒気を含んだ声に、もし相手が普通の人間だった場合なら脅えて逆らう気持ちで、さえも、失っていたことだろう。

しかし、今、プレシアが戦っているのは体が影のようなものでできている異形の者。

よって、脅えることなく、向かってくる。

それにプレシアは

「いい加減にしなさい!!」

特大の雷を放ち、応戦する。

そして、化け物は消滅するが

「味方を楯にして突っ込んで来るなんて良い度胸ね・・・でも、私はそういうのが大嫌いなもの!! 昔の私を見ているみたいで」

「プレシア。解析完了です」

プレシアのデバイスであるメデューサは演算を開始する。

メデューサは主に雷を制御するために作られたデバイスではない。

どちらかと言うと、相手の行動を停止するために作られたデバイスである。

その真骨頂は『麻痺』である。

それは神経の麻痺、筋肉の麻痺と言ったようなことをプレシアの雷で行い、相手を動けなくする、そう、まさに相手を見ただけで石のように動けなくするのだ。

しかし、本来、これは通常の生物を相手にする時に本来の力を発揮する。

今回のような、生物の理論が通用するか分からない相手には、あまり意味のない力。

戦闘が始まってからプレシアはメデューサには最低限の補助をしてもらうだけで、殆どの魔法を自身の脳で演算していた。

その間、メデューサが何をしていたかと言うと。

「アリシア！！ 解析が終わったわ！！ 上に飛びなさい！！」

「うん、ママ！！」

アリシアが上に飛ぶ。

そして、フェイトを再び自分に密着するように抱きかかえる。

「メデューサ！！」

ゴーゴンライトニング
「石雷！！！」

すると、プレシアの足元から今までとは比べ物にならない量の雷が地面をはいながら進む。

そして、残った八体の化け物に当たる。

すると、化け物達の動きが止まる。

まるで、女神に睨まれたかのように。

「アリシア！！！」

「うん！！！」

地面に着地すると同時にアリシアは自身の周りにいた化け物、四体を剣で切り裂く。

動けない相手を倒す程、楽なことはない。

「後は、そっちの・・・ママ！！ フェイト！！ 危ない！！！」

プレシアとフェイトに向かって一体の化け物が向かって来ていた。

プレシアのゴーゴンライトニングを受けたとみせかけて、実は逃れていた一体だった。

「しまった！？！」

プレシアとフェイトをまるで包みこむかのように体を広げ包み込も

うとした時。

「 エクス

カリバー 」

大量の魔力の奔流が化け物を包む。

「遅くなって、ごめん」

そう言ったのは梨桜とユニゾンを果たし金色の髪に翠色の瞳になった奏だった。

彼の右手には黄金に輝く聖剣、エクスカリバーが握られていた。

「いえ、ピッタリよ」

奏にそう頬笑みかけるプレシアの声が聞こえた時には化け物達は奏のエクスカリバーによって倒されていたのだった。

「あうあう・・・」

現在、僕達はミッド郊外を離れてプレシア邸に来ている。

一応、先にプレシアとアリシアにはフェイトを連れて帰ってもらいたかったんだけど、フェイトが僕も一緒に来て欲しいと言ったので、僕は調査をクロノが用意した執務官部隊にお願いして一端、現場を後にすることにした。

執務官の平均魔導師ランクはA A Aランクらしいので、そうそう、奴らに後れをとることもないだろう。

でも・・・フェイトが無事だったのは何よりだけど・・・フェイトのメンタルは大丈夫かな？

今まで死んでいたと思っていた母と姉が実は生きていたんだ・・・一応、僕が昔、生きていると、言っておいたけど・・・フェイトは信じてなかったみたいだ。

それは今の様子から見ても分かる。

プレシア邸でプレシアさんから出された紅茶を一口も飲まずにずっと下を向いている。

本当なら僕が何か言ってあげるべきなのかもしれないけど・・・あくまで僕と梨桜は今回のことは部外者だから・・・。

今まで、沈黙を保っていたプレシアさんが口を開く。

「久しぶりね、フェイト」

その声を聞いた瞬間、フェイトが体を小さくして震えだす。

「本当に・・・本当に・・・母さんの？」

「・・・ええ。私よ」

アリシアと梨桜は黙っている。

おそらく、僕と同じで自分は何も言うべきではないと、思っているのだろう。

「・・・あの日、時の庭園が崩壊し始めた、あの時」

プレシアさんが話し始めたのは、あの日の真実。

それは僕がプレシアさんを助けて、アリシアの蘇生を行ったこと。

それを聞いたフェイトは涙を流し始めた。

「なんで？・・・なんで？ 母さんは死んだ・・・だから・・・だから・・・」

私は新しい家族と生きることを選んだのに。

その言葉がプレシアさんに・・・いや、この場にいる全員の胸に刺さる。

それはフェイトに真実を話さずに隠してきた僕達の罪悪感なのだろう。

「ごめんなさい・・・いくら謝っても許されることではないのは分かっているわ。でも、言わせてちょうだい。ごめんなさい」

そこから、また沈黙が続く。

唯一、聞こえてくるのはフェイトがすすり泣く声だけだ。

自分が何もできない、無力さをここまで、味わったのはいつ以来だろう？

偽善と分かっているけど、助けたプレシアさんのことが終わった時？

闇の書を自分の都合で改善した時？

梨桜が僕のせいで闇に呑み込まれた時？

「私は・・・私は・・・」

フェイトが未だに泣きながら言葉を発する。

それを僕たちは黙って聞く。

「許さない」

その言葉を聞いた時、プレシアさんの顔は・・・死刑宣告を待つ罪人のような顔だった。

「・・・でも・・・でも・・・あの時、言ったように私は・・・私は・・・あなたが、作ったただの人形なのかもしれません・・・」

でも、私、フェイト・テッサロッサはあなたに生み出してもらって、育ててもらった、あなたの娘です。私はあなたを許しません。でも、でも、でも、あなたは私の大切な母親です」

「フェイト」

プレシアさんは瞳から涙をこぼしながらフェイトに駆け寄りフェイトを抱きしめる。

クロノ・・・確か、君は言ったよね？

あの時、『世界はいつだって、こんなはずじゃなかったことばかりだ。昔から、そうだ。いつだって、誰だって、そうなんだ！』

でも、さ。

僕はそれは違うと思うな。

世界はいつも、いつも、こんなはずじゃなかったことばかりだけど・・・生きている限り、いつか必ず、こんなはずじゃなかった過去を取り戻せる日がやって来るんじゃないのかな？

自身が幸せを追求する限り。

必ず。

だって、そうじゃないと、世界には絶望しか存在しないはずだから。抱き合って泣き合う、フェイトとプレシアさんを見ていたら、そう思うよ。

「私もそうだと思いますよ、奏」

いつの間にか隣に来てくれていた梨桜がそう言ってくれる。

「そうだね」

「今回も負けちゃったね」

ミッドチルダ郊外で一人の少女が破壊された廃ビルを見つめていた。

彼女は着ている黒いローブのフードを深くかぶっているために顔は一切、見えない。

少しだけ見える口元は少女の言葉とは裏腹に笑っている。

自分で『負けた』と言っているのに微塵も悔しさを感じている雰囲気はない。

「お姉ちゃん達も馬鹿じゃないから、今度はお兄ちゃん達が攻めて

来るかな？」

少女の独り言は誰にも聞かれない。

彼女意外にこの場には誰もいないから。

「でも、攻めさせてあげない」

少女は足元に転がっている壊れたデバイスの残骸を踏みつける。

「だって、お姉ちゃん達には私は負けられないから」

その言葉には確かな決意があった。

「なんてこった!!」

クロノは自分の執務室でまたもや、自分の机を叩いた。

今回は理由が理由だけにエイミィも注意しない。

いや、できない、と言った方が正確か。

エイミィはその映像を見て恐怖していた。

執務官の補佐として、どんな状況にもできる限り平常心で望む彼女だが・・・今回に限っては冷静でいられない数少ないケースの内の一つだった。

彼らが見ている映像・・・それは

『執務官部隊全滅』

の映像だった。

「相当な手誰を送ったんだぞ！！」

それが・・・ただ黒い影でできた人間のような生物に蹂躪されて行く。

倒れた執務官に、影の化け物はその体ごと張り付いて、消し去る。

この映像を命からがら届けてくれた執務官は現在、医務室で怪我の

療養をしている。

しかし、あまりの恐怖から少し錯乱状態に陥っているのが確認されているため、すぐに事情聴取というわけにはいかないだろう。

クロノの執務官室に通信が入る。

『クロノ執務官、至急、会議室まで起してください』

「クロノ君・・・」

「ああ、エイミィ。今回の件の処分だろう」

彼は今回、将来有望な執務官と執務官補佐を多く失い、さらに新人の中で最も優秀とされているフェイトに自分のミスで怪我を負わせた。

「提督試験の合格取り消しくらいで済めばいいが・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4543n/>

魔法少女リリカルなのは～集う光～

2011年6月10日00時23分発行